

女子高生に生まれ変わったヒカルは佐為と打ちたい

寛喜堂秀介

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気がつけば過去の時代。

女子高生に生まれ変わった進藤ヒカルは、佐為と対局するため、小学生のヒカルをつけねらう。

シヨタコン女子高生の完成である。

目次

01	女子高生、生まれ変わりを自覚する	1
02	女子高生、潜り込む	8
03	女子高生、打つ	15
04	女子高生、迫る	22
05	女子高生、結果を知る	33
06	女子高生、連れ込む	40
07	女子高生、奪われる	49
08	女子高生、応援される	56
09	女子高生、見つめ直す	63
10	女子高生、訪ねる	70
11	女子高生、訪れる	79
12	女子高生、迫られる	87
13	女子高生、見入る	94
14	女子高生、渡す	102
15 (終)	元女子高生、打ち続ける	111
検討01	和谷義高の場合	119
検討02	葉瀬中囲碁部の場合	126
検討03	進藤ヒカルの場合	133
検討04	塔矢アキラの場合	142

01 女子高生、生まれ変わりを自覚する

——私の声が聞こえるのですか？

きっかけは、ふいに届いたそんな声。

日宮ゆかりは唐突に。自分が進藤ヒカルだったことを思い出した。当たり前だがめちやくちやく戸惑った。

女子高生である。16歳の乙女である。

なのに「あ、オレ進藤ヒカルだ」と思ったことに、まったく違和感がないのだ。

「いや、それはどうでもいい。それよりあの声だ」

どうでもよくないことを放り投げて、ゆかりは自室から冬の淡い空をあおぐ。

「——佐為」

なつかしい名前だ。

平安の世で非業の死を遂げ、千年の時を過ごす棋士の幽霊。

そして進藤ヒカルにとっては、かけがえのない相棒だ。

ヒカルは佐為と出会い、二人三脚で碁と向き合い……そして永遠に別れた。

それが1年前——2001年春の出来事。

だがゆかりが知る現在は、1998年の冬だ。

進藤ヒカルからすれば、過去に戻っている。

それも、ヒカルと佐為にとって、重要な時代に。

「……そうだ。ちょうど、オレが佐為と出会った時期だ」

思い出す。

祖父の蔵でお宝を漁っていた時、投げかけられた佐為の声。

それは、さきほど聞いた言葉と、寸分違わない……ということは。

思い至ると、日宮ゆかりは即座に財布だけをひつつかみ、部屋を飛び出した。

——佐為が居る！　ちようどいま昔のオレに語りかけてんだ！

そう思うと、居ても立ってもいられない。

「ちよつとゆかり、あわててどうしたの？」

「ごめん、かーさ——じゃない母さん、待ち合わせしてたの忘れてた——っ！」

「ゆかり！　部屋着で行くつもり？　財布は？」

「時間ないからこのまま行く！　財布は持った——！」

不審げな母にいろいろ誤魔化しながら、ゆかりは家を飛び出した。

佐為と会ってどうするか。

そんなもの、決まりきっている。

——もう一度、佐為と碁を打ちたい！

佐為が消えたその日から、ずっと求め続けてきた願い。

それを叶える、奇跡のような機会が訪れたのだ。

そうしてゆかりは、同じ区内にあるヒカルの祖父の家に向かい。

……ヒカルを乗せた救急車が、祖父の家から走りだしたところだけは、なんとか確認できた。

「ま、間に合わなかった……」

ゆかりは路上で、がくりとくずおれた。

間に合ったところで、そもそもどんな立場で突撃するつもりだったのか。

たぶん本人も知らない。



翌日の下校時間。

場所は進藤ヒカルの家から祖父の家に向う通り道。

こちらに歩いてくるヒカルを待ち構えながら、日宮ゆかりは遅ればせながら気づく。

「どうしよう。見ず知らずの小学生男子に声をかけていい理由が、欠片もみつかんねえ……」

あたりまえである。

いくら元進藤ヒカルだったとしても、いまの進藤ヒカルとは面識などないのだ。

「とういか……うわー、我ながらクソガキだなあ」

幼いヒカルの姿は、やんちゃな小学生、という言葉がぴったりあてはまる。

かつての自分を客観的に見ることになったゆかりは、なんだかいたたまれない。

ヒカルの背後に佐為の姿は……見えない。

状況的に、もうとり憑いてるはずだが、姿はないし、声も聞こえない。

だけど、気配がある。

泣きたいほどに懐かしい、佐為の気配が、ゆかりには確かに感じられる。

——居るんだな。佐為……そこに。

心のなかで、呼びかける。

返事などない。

いや、そもそもゆかりの心の声など、届いていないのだろう。

——でも、いいんだ。佐為が見えなくても。佐為と話せなくても。お前と打つ方法はある。

塔矢アキラが、緒方精次が、塔矢行洋が、そうしたように。

ヒカルを通して、佐為と碁を打つことができる。

——まあ、いまのヒカル^{こいっ}じゃ無理だろうけどな。

なにせ佐為と出会った当初のヒカルは、囲碁にまったく興味が無い。

塔矢アキラと出会って、筒井部長と出会って、ヒカルはようやく真剣に囲碁と向き合うようになったのだ。

——かまわねえ。待つよ。昔のオレが、ちよつとはマシな碁打ちになるまではな。

だから、いまはただ、声をかけよう。

自分の存在を記憶に刻ませるために。

思い切って一歩、前に踏み出す。

「こんにちは。今日はとってもいい天気だね」

女子高生が男子小学生に声をかける事案の発生である。

○

「……さて、ひとまず顔見せは終わり、と」

ヒカルの背を見送りながら、ゆかりは息をついた。

軽く挨拶を交わしただけ。

ヒカルもすぐに忘れてしまうだろう。

だが、つぎに出会った時、ゆかりが声をかける理由づけにはなる。どのみち事案だが。

「でもなー。やっぱふたりで碁を打つてのはハードル高えよなー」

ヒカルが囲碁部に入るのを待つ手もあるだろう。

その頃のヒカルであれば、対局を面倒くさがりはしない。

でもそれは何ヶ月も先の話だし、なにより碁に積極的なのが災いして、自分の力で打とうとするかもしれない。

5

——それより前で、ヒカルが絶対に打つってタイミングといえは。

ゆかりは記憶を掘り返しながら、考える。

塔矢行洋の碁会所に打ちに来たところに割り込む、のは、マズい。

塔矢アキラの存在は、進藤ヒカルが碁を打つモチベーションそのものだ。

ふたりの出会いを邪魔してしまえば、最悪ヒカルは、碁に対する情熱を持ってないままになるかもしれない。

「……焦るな。いまはまだ、距離を縮めることに専念すりゃいい。仲良くなったら、佐為と打てる機会はぜってー来る」

ゆかりはぶつぶつとつぶやく。

たとえその気がなくても、言ってることが、まるきり男子小学生を狙う女子高生である。

「けど小坊の頃のオレだしなあ。高校生の、しかも女が近づいて、懐くかなあ……ラーメン奢ってくれたら懐くな、間違いなく」

脳内でシミュレートしてみて、思いの外上手くいってしまったことに驚愕した。

まあヒカルのチョロさは問題だが、ゆかりにとっては好都合である。おまわりさんこいつです。

「となると、まずはバイトしなくちゃな。ラーメン代に困らないくらいには稼いどきてーし……碁盤と碁石も欲しいもんな」

父に頼めば買ってもらえる気はする。

しかしモノが碁盤だ。そんなものを急に欲しがれば、不審がられる。

テレビゲームでハマって……という言い訳は使えない。

そもそもゲーム機を持っていないので、理由として持ち出すのは無理がある。

「とすると、やっぱりバイトに絡めるのがいいかもな。こう、碁会所でバイトを始めて、自分でも囲碁に興味を持って……ってことなら、不自然じゃねえだろ」

そもそも碁会所でバイトを始める事自体が唐突といえは唐突なのだが、そこは考えないものとする。

唐突ではあっても不自然ではないから押し切れる。いける。とゆかりは自分を励ます。

「ただ碁会所つつつても、河合さんたちの居る『道玄坂』みたいな煙毛

クモクなどこだと、親が心配しそうなんだよなあ。オレあそこ好きなんだけど、バイトするならもつとお上品なところじゃないと……たたとえば、塔矢先生の「囲碁サロン」とか？」

悪くない、と、ゆかりは思った。

「——実力を隠して、塔矢のヤツと関わらねーなら、進藤ヒカルと塔矢アキラの関係は変わんねえはず。そこさえ気をつけんなら……ふたりの対局を観戦できれば……布石としては悪くねえ」

ゆかりが「強いヒカル」を知っていれば。

対局になった時、ヒカルは佐為に打たせるだろう。

そこは自分だけあって、進藤ヒカルの心理は読み取れる。

なお囲碁サロンがバイトを募集しているか。

募集していたとして、採用されるかまでは、考えが及んでいない。

「——よし！ 善は急げだ！」

と、気合を入れて。

日宮ゆかりはその場を後にする。

もう少し長居していたら、家に帰るヒカルと顔を鉢合わせて、不審者として覚えられたことだろう。悪運が強い。

02 女子高生、潜り込む

——進藤ヒカルとお近づきになる。

下心満載で求人はないかと特攻して、なんとか囲碁サロンでバイトを始めたゆかりは、店の雰囲気はすぐに馴染んだ。

なにせ囲碁とは縁のない日常に現れた、囲碁一色の空間だ。

先輩の市河さんは優しいし、碁を打ちながら囲碁談義に花を咲かせる北島さんや広瀬さんには、懐かしさも手伝って親近感を抱いてしま

う。
自然と上機嫌になるし、そうなる常連のおじさんたちも気分がいい。

こうして囲碁サロンに受け入れられたゆかりだが、唯一塔矢アキラには困らされた。

サロンの片隅で、指導碁がない時は一人で棋譜を並べている彼を見ていると、つい声をかけたくなくなってしまふのだ。市河さんこいつです。

——仕方ねえだろ。昔はそうしてたんだから。

進藤ヒカルだった頃は、ここでよく塔矢アキラと対局していた。

対局のあとの検討では喧嘩腰で、みんなには迷惑だったかもしれないと、店員になったゆかりは、いまさらながら反省する。

「——あの」

と、視線に気づいたのか、塔矢アキラが遠慮がちに声をかけてきた。ゆかりの記憶よりだいぶ幼く、おかっぱっぽい髪型のせい、見ようによっては女の子に見えなくもない。

「はい。なんででしょうか」

勤務中なので違和感と戦いながら敬語で返す。

まあ、いまのゆかりが、昔のように塔矢とタメ口で話したら問題だ。距離感の詰め方がおかしいし、狙っているのかと市河さんに詰められる。ゆかりだって命は惜しい。

「気になってたんですが、日宮さんは、囲碁を勉強されてるんですか？」

「えーと、そうですね。いろいろと勉強中って感じですよ。アルバイトも、碁盤と碁石が欲しいなあって思って始めたんですよ」

「そうなんです。石の並びを目で追う姿が、強い人のそれだなんて思ってたので」

——あぶねえ。すました顔して細けえとこ見てやがる。

平静を装っているが、内心は冷や汗ダラダラである。

「打ってみませんか」って言われたらどうしようかと肝を冷やしている。

「へえ。じゃあ一度こっちで打ってみないか？」

「北島さん、そりやズルい。ゆかりちゃん、よければわしが教えてあげよう」

「いやいや俺が」「俺が」

常連の北島さんがなんの気なしに言ったのがきつかけになって、周りのオッサンどもが、我も我もと声を上げはじめた。

どっちにせよここで打つのはマズいと焦るゆかりだが、周りは盛り上がり断る空気じゃなくなっている。

「はいはい！ ゆかりちゃんが困ってるでしょう！ 勤務中は控えて

ください！」

市河さんが注意して、なんとか事なきを得た。

——アセったー。

ゆかりは胸をなでおろす。

その後、囲碁サロンにやってきた子供が塔矢に挑戦したことで、話はうやむやになった。

子供名人だけあって、それなりに実力はあったのに、ばつさり一刀両断。容赦なしである。

ゆかりは内心苦笑しながら「それでこそ塔矢」とうなずいた。そんなゆかりを見た市河さんがジト目になった。

○

ゆかりがバイトを始めて、しばらく経った日曜日。

待ちかねたその日が、ついに訪れた。

進藤ヒカルが、囲碁サロンにやってきたのだ。

「いらっしやいませ。もしかして塔矢くんにご用ですか？」

勝手がわからずきよろきよろしているヒカルに声をかける。

塔矢に意識を向ける意図もあるが、先日の子供名人の一件もあるから不自然ではない。

「え？ 塔——なんだよ佐為……こないだ会った？」

佐為と会話してるのを隠せていないが、ゆかり以外が気づくことはないだろう。

——というかハタから見ても完全に不審者だな、昔のオレ。

そんなことを考えながら、ゆかりは笑顔を向ける。

「出会ったというか、挨拶しただけというか。覚えていてくれてありがとう」

「いや、オレは……」

「キミも碁を打つんだね——ここは初めてだよ。とりあえずここに名前をお願いします。あと棋力はどれくらい？」

「いや、ここもなにも、まるきり初めてなんだけど……キリヨク？ とりあえず碁が打てれば……あ、なんだ。子供居るじゃん！」

ゆかりの説明に、ヒカルは困ったように視線をさまよわせて。

同年代の少年を見つけて、喜び勇んで塔矢アキラに絡みだした。

——うんうん、懐かしいなあ。オレと塔矢の初対面、こんな感じだった……こんな感じだったか？ 記憶より8割増しでクソガキなんだけど……うわー。まあ塔矢相手だからいいか。

過去の自分の行いを反省しながら、ゆかりはふたりの対局が見える位置に移動する。

さすがにサボっていると怒られるので、仕事をしながら、ときどき盤面に視線を送る。

——うわあ。昔の佐為って感じだなあ。

ゆかりは感慨にふける。

定石が古い。にも関わらずヨミの深さを感じさせる応手。

まるで本因坊秀策が現代に来て、初めて碁を打ったかのような。

石の置き方は、不釣り合いに頼りなく、たどたどしい。

その向こうに、佐為の姿を幻視して——ゆかりは衝動に駆られる。いますぐ打ちたい。佐為と戦いたい。

このヒカルは、まだ未熟と評することすらおこがましい状態だけど、ちよつと味見するくらい……

——ダメだ。

かろうじて我慢する。

いまのヒカルは、まだ囲碁に対して本気じゃない。

無理やり打たせて囲碁に苦手意識を抱かれてはマズイ。

——ゆつくりと。囲碁の沼に腰まで浸かってから、引きずり倒して捕まえりゃいい。

自然、口の端がつり上がる。

その表情を、佐為に見せないように、ゆかりは碁盤に背を向ける。背を向けながらも、思考は勝手に次の手を想像している。

——こんときの佐為は、コミすら知らねえ。だが、それでも……塔矢は佐為に、はるかに及ばねえ。

背後で、塔矢が息を呑む気配を感じる。

ど素人のような少年が持つ、はるか高みの——藤原佐為の技量を肌で感じてしまったのだろう。

ここから、塔矢アキラの、佐為の幻影を追い続ける旅が始まる。以前と同じように……だが。

——お前に佐為は渡さねえ。あいつと打つのはオレだ。

ゆかりは心のなかで告げる。

たしかに塔矢アキラと進藤ヒカルはライバルだった。

目標であり、振り向かせたい相手であり、追いつきたい強敵だった。北斗杯でもに戦ったという意味では、仲間と言っていていいかもしれない。

——お前には進藤ヒカルがいる。いまはまだスタートラインにも立ってねえが、いずれお前に追いつくライバルだ。

進藤ヒカルが、囲碁に真剣に向き合うことを願っている。

塔矢アキラが、ヒカルにとってのよい目標になってくれることを期待している。

すべては、ゆかり自身が藤原佐為と碁を打つため。

——早く育てよ進藤ヒカル。佐為の碁は……スゲエんだぜ。

静かに、拳を握り込む。

類稀なる囲碁の上手は、対局の気迫に鬼が宿するという。

鬼の気迫を揺らめかせながら、日宮ゆかりは心の内で対局の行方を追う。

その姿を目で追う、この世ならざる棋士の視線に気づかぬままに。

対局が終わり、ヒカルは席を立った。

受付の市河さんがヒカルに声をかけた、その横から、少しだけ口を挟んで、じわりと距離を縮める。

このあたりで「顔見知りのお姉さん」くらいに思ってもらえればしめたものだ。などと考えるゆかりの横で、市河がジト目を向けているがこいつも同類である。



まずは第一歩。

この一件でゆかりは「ヒカルが強いと知る人間」になれた。

もし打つ機会が出来たとき、ヒカルが佐為に打たせやすくなったということだ。

来週には、こども囲碁大会。

そして塔矢アキラとの二度目の戦いがある。

ヒカルと出会う機会には事欠かないが、対局してもらおうとなると――問題がある。

「いまのオレって囲碁に興味ねえからなあ……本気になりだしたのは、加賀に無理やり連れてかれた中学の団体戦からだ」

ゆかりの記憶がたしかなら、大会は葉瀬中の創立祭の翌週の日曜。それ以降のヒカルなら、頼めば対局してくれる……かもしれない。

「でも打つつつてもこの頃のオレ、身の回りに囲碁の道具、まったくねえんだよなあ」

ヒカルが囲碁部に入って日常的に碁石を触りだしたのが春以降。祖父に碁石と碁盤を買ってもらったのが、その年の冬くらいだった。

ゆかり自身は、バイトしたお金で、安いものではあるが、ちゃんとした碁石と碁盤を買った。

しかしだからといって、女子高生のゆかりが男子小学生のヒカルを家に誘うのは……完璧に事案である。

「あれだ。昔使ってた布の碁盤とか……いや、マグネットのおもちやみてえな碁盤でもいいや。それを買って……」

あくまで佐為と打つための作戦である。

しかしどうやって男子小学生を誘うか、真剣に戦略を練る姿は、犯罪の匂いしかなかった。

03 女子高生、打つ

「進藤くん。また会ったね」

時が過ぎ、中学の囲碁団体戦が終わってから、しばらく。

商店街を歩いていると、書店から出てきた進藤ヒカルを見つけたので、ゆかりは声をかけた。

声をかけるにはやや離れていたため、小走りに駆け寄る姿は、見様によつては少々危ないが、ゆかりにとっては大事の前の小事である。

「え、えーと……あ、塔矢の碁会所のお姉さん！ 若い方の！」

ゆかりのせいで市河さんに深刻な風評被害が生じている。

「そうそう。碁会所のお姉さんの日宮ゆかり。こんなところで奇遇だね、進藤くん」

「え、オレの名前をなんで……あ、囲碁サロンで」

「うん。サインして貰ってたし……なんだか妙に縁があつたからね。また会えそうな気がしてたんだ」

いけしやあしやあと言う。

実際はヒカルの生活圏も行動パターンも把握していて、会いに来ただけである。おまわりさんこいつです。

「ひよつとして、囲碁の本とか買いに来てたの？」

「あー、それとジャンプかな。おかげで今月ゲーム買えなくなつたけど……」

「さすが。勉強熱心なんだね。わたしも囲碁の勉強中なんだけどさ。身近に打つ相手がいらないから、なかなか苦勞してるんだよね」

「へえ、おねーさんも碁、打てるんだ？」

「うん。こう見えてけつこう強いよ。でも友達みんな囲碁に興味がないから……せつかくこういうの持って行っても、五目並べしかやつてくれないし」

言つて、カバンからマグネット式の小さな碁盤を取り出す。

「わ、ちつちえー！でも碁盤だ……佐為、騒ぐな！」

後半は小声だったが、ゆかりはぼつちりと聞きつけている。

狙い通り、佐為が食いついてきた。あとはヒカルをその気にさせれば。

「そうだ！進藤くん、わたしと打つてくれない？お礼にラーメン奢るから！」

「え、ホントに？やるやる！」

ヒカル用のエサを示すと、一瞬で食いついてきた。

そんなにラーメンが好きなのか。わかるよ。

ゆかりは内心で、深く同意した。



それから、近くの公園に移動して。

休憩所の石のテーブルで、二人は対局を始める。

碁盤を広げ、石をより分けて、対局の準備を済ませたゆかりは、懐から白扇子を取り出した。わざわざ棋院まで行つて購入したものである。

ヒカルがゆかりと背後を交互に見ているのは、佐為の扇子と見比べているに違いない。

扇子を開いて口元を隠しながら、ゆかりは心のなかで手ぐすねを引

く。口の端は、ヒカルにはお見せできない感じにつり上がっている。

——さて、ヒカルが出るか佐為が出るか。

この対局、佐為が出てくる公算が高い。

なにせゆかりは、塔矢アキラと佐為の対局を知っているのだ。

不審に思われないためには、佐為に打たせるはず……なのだが、ヒカルが「オレが打ちたい」という衝動に抗えない可能性も、なくはない。

——ヒカルが打つなら、オマエが囲碁を嫌いにならないよう、たっぷり甘やかしてやるよ。

ヒカルが碁を嫌いにならないければ、またチャンスは来るはずだから。

心の中でそう決めて、ゆかりは目をつぶる。

——でも、佐為が打つなら。

目を開き、マグネットの石を握る。

ゆかりは白。先番のヒカルが、左下隅小目の位置に、黒石を置く。

そこに佐為の気配を感じて——ゆかりは無意識に口の端をつり上げる。

——つと、あぶないあぶない。ヒカルを怖がらせちゃダメだ。

気づいて、ゆかりは自重する。

最初の一回は大事だ。

いくら佐為が望んでも、ゆかりとの対局に息苦しさを感じたら、ヒカルがおよび腰になってしまうかもしれない。

——会話は楽しく、笑顔は優しく。

そして、打つ手は美しく。

佐為の布石に合わせて、静かに白石を打つ。

白と黒、二色の石が、盤面を鮮やかに彩っていく。

戦いは静かに始まった。

左下隅から中央に広がる黒の一团に、ゆかりの白石が突き刺さる。

左辺全体を巻き込んだ戦いはたがいに譲らず、五分のワカレとなる。

——さあ、ヒカル。オレたちの対局を見やがれ。

石の流れは綺麗でよみない。

紡がれる棋譜の美しさは、いまのヒカルにも理解できるだろう。

これは指導碁だ。

佐為が厚意から始めて、ゆかりが精一杯に応えた攻防。

ゆかりの技量を量る一手が、次第に厳しいものになっていく。

すべての問いに、優等生のように答えて……最後は半目差の負けで決着がついた。

「……ふう。ありがとうございました」

「ビックリした。お姉さんスゲえんだな」

「ははは、それはこっちのセリフだよ。とんでもなく強いね進藤くん……やっぱり中盤のここで後手踏んだのが敗因かな？」

「えーと……そうだな。そこはノビて先手でこっちに手つけたほうが大きかったかも」

佐為からの伝言なのだろう。

ヒカルが半ば棒読みで敗因を説明する。

その指摘に、在りし日の佐為を思い出す。

ヒカルの言葉が、佐為の言葉で再現される。

——ああ、佐為と打てたんだ。

ゆかりは感動に身を震わせる。

出来れば指導碁などではなく、自分のすべてを佐為にぶつきたい。だけど、いまはまだ無理だ。準備が整っていない。

佐為の碁を現実のものにしている進藤ヒカルが、精神的にあまりにも未熟なのだ。

——早く熟せよ、進藤ヒカル。オマエの準備が整ったら……いまの佐為が知らない未来^{オレ}の碁を、見せてやれるから。

白扇子を指先で撫でながら、ゆかりは心のなかで佐為に語りかける。

その視線は、獲物を狙う獣のそれで……そんな視線を男子小学生に向ける女子高生が居るらしい。

○

「進藤くん、今日はありがとうね」

ラーメン屋で注文を済まして、待つ間。

ゆかりはヒカルに、感謝の気持ちを伝えた。

絶対にかなわないはずだった佐為との対局を、実現してくれたのは、ヒカルだ。

たとえ本人が無自覚でも、ゆかりがそう仕向けたとしても、お礼は言っておきたかった。

「いいっていいって。佐為もよろこんで——違う違う。かわりにラーメン奢ってもらってるんだし」

「でもほんとに楽しかった。いままで打つ相手が居なくて困ってたから」

「……えーと、おねーさんはどうやって碁の勉強を？ 師——先生とかいかなかったの？」

この問いは、佐為がヒカルに頼んだものだろう。

「ゆかりでいいよ」と前置きしてから、ゆかりはいたずらっぽいなを浮かべた。

「そうだね。しいて言うなら本因坊秀策かな」

「えっ虎次郎？」

秀策のことを幼名の虎次郎で呼ぶのは、わかる人にしか伝わらないんじゃないだろうか、と思いながら、ゆかりはうなずく。

「そう。秀策の棋譜は、ずっと並べてるから」

「キフ？ なるほど、対局で打った手順……それで、虎次郎が先生なんだ」

「まあね。でも進藤くんも似たようなものなんじゃない？ 進藤くんの打ち回し、ものすごく秀策っぽい」

「え？ あー、そうそう。オレも虎次郎ベンキョーしてて。ハハハ」

盛大に目を泳がせながら、ヒカルは答えた。

そんな少年に、ゆかりはズイ、と身を寄せる。距離が近い。

「ねえ、進藤くん。これからもさ……わたしと打ってくれない？ なんでも好きなもの、奢ってあげるからさ」

「えっなんでも——っ、佐為！ よろこぶな！ 騒ぐな！」

佐為が騒いでいるのか、目を輝かせたヒカルは次の瞬間、悶絶する。ゆかりは佐為の姿を想像して、慈しむような目でヒカルの様子をな

がめている。

「わかった。そんなにオレと打ちたいんだったら、つき合うよ……ゆかり姉ちゃん」

「ありがとう進藤くん！」

感激して、ゆかりはヒカルの手をぎゅっと握りしめる。

さきほどからの様子に、通報したほうがいいのか迷いながら、店主は出来上がったラーメンをふたりに差し出した。

04 女子高生、迫る

春、始まりの季節。

4月になって、進藤ヒカルは葉瀬中に進学した。入学前から縁のあった囲碁部に入って、海王中打倒を目標に頑張っている。

なので新学期になってから、ゆかりはヒカルと会う機会がめっきり減ってしまった。

「春までは週に2日は会えてたのに半減状態……どうして……」

高校2年生になった日宮ゆかりは、悲しみに暮れた。

「週イチは会えてんじゃん」とゆかりの友人たちは思ったが、誰もツッコまなかった。もはや処置なしだと知っているから。

友人たちは、ゆかりのことをシヨタコンだと信じて疑わない。

女同士の友情を放棄して、男子小学生と遊び倒してる女への評価としては、極めて真つ当だろう。

しかも会計の類はすべてゆかり持ち。

シヨタに貢ぐ女子高生がここにいた。

むしろ友達続けてくれてるだけ温情である。

そんなこんなで、新学期に入っただけ経った日曜日。

バイトの出勤で囲碁サロンにやってきたゆかりは、なんとというか、どよん、と沈み込んだ塔矢アキラの姿を見つけてしまった。

市河さんいわく、ヒカルが碁を打ってくれない……どころか顔も合わせてくれないのが原因らしい。

——気持ちわかる。オレもこのところヒカルと会う機会減ったし。

ゆかりはアキラに優しい視線を向けた。

週イチで会って対局している上に、いつしよに食事までしているくせに同類ヅラである。

「そういえばゆかりちゃん、買いたいって言った碁盤はもう買えた？」

淀んだ空気を変えようと思ったのか、ふと市河さんが尋ねてくる。

「はい。無事買えました。安いやつですが、脚付きです」

「素敵ね。いいお道具を買うと、打つのが楽しいんじゃない？」

「それはもう」

ゆかりは笑顔で答える。

実際、自分で働いて稼いだお金で手に入れたと思うと、碁石を触るのが楽しくてしかたない。

「でもうれしいわ、ゆかりちゃん。ここでのアルバイト続けてくれて」「やっぱりこの雰囲気好きだし、他に欲しい物もありますし、ご迷惑でなければ、まだまだお世話になりたいです」

ヒカルとのラーメン代も稼がないといけないし、と言葉を続けるのは、アキラの手前自重した。

「へえ、碁盤の他に？ なにが欲しいの？」

「いま欲しいのはパソコンかなあ……といっても、けっこう無駄遣いしちゃってるので、現在お父さんに融資を希望中です」

パソコンが欲しいのは、ネット囲碁を始めるためだ。

夏休みには、ヒカルは三谷のお姉さんがバイトしているインターネットカフェに入り浸り、「sai」として囲碁界に一大旋風を巻き起こす。

そんな「sai」と打ちたい。あるいは、上手くやればパソコンを使わせるといふ名目で、ヒカルを部屋に連れ込むことすら可能かもしれないと、ゆかりは目論んでいる。事案である。

「パソコンかー。いいわねえ。でも私はちよつと尻込みしちゃうかなあ……ゆかりちゃんはパソコンくわしいんだ？」

「実はあんまり。マウス動かしてネット囲碁するくらいなら、って感じですかね」

「——ふたりとも、こんにちは——」

そんな風に雑談していると、空気をふわふわさせることに定評のある芦原さんが入ってきた。

助かった、と思つたのは常連たちもいっしょだったようで、皆救われたように芦原さんに声をかける。

「はいみなさんこんにちは——おやアキラ。どうしちゃつたのそんなに落ち込んで」

とりあえず芦原さんマジ救世主、とみんな思つたという。



「へえ。じゃあ囲碁部の男子、3人そろつたんだ」

「ああ。しかも強えやつがな。これで団体戦に出れる。海王中打倒に向けて一歩前進だ！」

「即戦力の子なんてよく見つけられたね。どこで見つけたの？」

「こないだひとりでラーメン食いに行ったとき、碁会所に強い中学生が居るって話聞いたんだ。気になって行ってみたら、そいつ同じ中学のヤツだったんだよ。強いぜ。オレの次にだけど」

5月に入って何度目かの対局の日。

ヒカルは興奮気味に、囲碁部での出来事を語った。

ヒカルの次に、という言葉に、ゆかりは違和感を覚えた。

この頃のヒカルは、筒井部長にも負けて葉瀬中の三番手だ。

三谷とやったら10戦して10敗はカタい。それくらいの実力差はあった。

だがよく考えるとゆかりは佐為ヒカルの実力を知っている。

ここで「オレより強い」なんて言う方が、話がややこしくなるだろう。

——でもオレ、とっさに誤魔化せるほどアタマよかったかな？

そう思わなくもないが、ヒカルには佐為が居るので、不思議ではない。

「じゃあ頑張らないとね。打倒海王中、打倒塔矢くん」

「……ん？　なんでソコで塔矢が？」

「だって塔矢くん、ヒカルくんと戦うために海王中の囲碁部に入ったみたいだから……」

「え、オレを追いかけて？　学校に押しつけてきただけじゃなく？」

オレと打つために？　うっそだろ……」

どん引きするヒカル。

その心情はゆかりにもわかる。

団体戦の会場でいきなり塔矢がやってきて「海王中の三将はボクだ」とか言ってきた時は正直ビビった。

——いまなら塔矢の佐為への執念は、痛えほどわかる……佐為への執念ならぜってー負けねえけど。

妙なところで対抗意識を燃やしつつ、ゆかりはヒカルに微笑みかけ

た。

「それだけ惚れてるのかもね。キミの打つ碁に」

「はあー？ 惚れてる？ ないない」

「そうかな？ そうじゃなきゃプロ行きをそっちのけにして、キミを追いかけたりはしないと思うけど」

「え、プロ？ 塔矢が？ たしかにそんなコト言ってたけど、そりやもつと先の話だろ？」

「そんなことないよ。囲碁の世界って、強い人なら中学くらいでプロになっちゃうらしいし……塔矢くんはいまでも、低段のプロに混じって頭を取れるくらいには強いよ」

なにせ、プロ試験は欠席した初日以外全勝。

プロに入ってから、無敗街道を突っ走り、一年半後にはトッププロに混じって打つほどになったのだ。実力も成長も飛び抜けている。

「まじで？ そんなやつが佐為……オレを……」

ヒカルが身を震わせた。

だが、塔矢アキラが執着するのも当然だ。

佐為の実力は、現状でもトッププロレベル。

ネット碁の経験を経て強くなった佐為は、碁界の頂点——塔矢行洋に匹敵する。

自分と同一年でそれほどの実力者を見つけてしまったのだ。そりや脳も焼かれる。

——なんだろう。いまのオレになつてから、塔矢の心理がわかるようになった気がする。

塔矢アキラと同じく、佐為を追いかける立場になつたからだろうか。

負けないが。と、ゆかりはいちいち対抗心を燃やす。

「……なあ、ゆかり姉ちゃん。ちよつと公園に戻らない？ 見てほしい棋譜があるんだけど」

「いいよ。でももう暗いから、喫茶店にしようか」

場所を喫茶店に移して、ヒカルはひとつの棋譜を並べた。

片方は三谷だろうか。

碁会所仕込みらしく荒いが力強い棋風。

もう片方は……かなり強い。

力強く、ぐいぐい押していく碁。

将棋部主将の加賀あたりかと、ゆかりは見当をつける。

「片方は囲碁部に入った即戦力の三谷だけど……こっちの方、どれくらい強さだと思う？」

「……並の実力じゃないね。院生——プロの卵でもない相手にならないと思う」

「じゃあ塔矢とくらべたら、どれくらい差がある？」

「3子……いや、4子。それくらい置き石がないと、まず勝ちの目が見えない」

ゆかりの言葉に、ヒカルは真剣な表情で考え込む。

「……なら、塔矢とオレの差は？」

塔矢と佐為の差は、ということだ。

おそらく定先か2子。ゆかりはそう判断したが、そのまま口にはできない。

「ごめんなさい。わたしはまだ、ヒカルくんの本気を知らないから」

ゆかりと佐為は、まだ真剣勝負の碁を打っていない。勝負の場の空気は過酷だ。未熟なヒカルを気遣って、双方の暗黙の了解で、指導碁にとどまっている。

「だったら本気で打つ！ それならわかるよな!？」

ムキになって、ヒカルはぐい、と顔を寄せてくる。

なぜそこまでこだわるのか、疑問に思うよりも先に。

ゆかりはヒカルの言葉に反応して、逆におでこをぶつけんばかりに顔を近づける。

「いいの？」

その口は、歓喜の形につり上がっていた。

○

喫茶店のテーブルに置かれた小さなおもちゃの碁盤。

震える手でマグネットの碁石をつまみながら、日宮ゆかりは喜悦を抑えきれない。

——そろそろ大丈夫だよな？ 実力はともかく精神的には……多
少怖い目みたところで、碁を辞めたりはしないよな？

やつとだ。

やつと佐為に、自分のすべてをぶつけられるんだ。

ゆかりは手に持つ白扇子を、曲げ折らんばかりに強く握りしめる。
先番はゆかり。

抑えきれない衝動をなだめるように、深呼吸。

ゆかりはそれから、右上隅の星に、黒石を打ちつけた。

始まりは、いつもの指導碁のように、ゆるやかに。ただど待ちきれない。布石を途中で放棄して、左下隅の白の模様に切り込む。

——佐為なら、厳しく咎めてくる。その一閃をサバいて白模様を荒らす！

「——っ！」

碁石を持つヒカルが小さく声を上げる。

囲碁の道を歩み始めたばかりのヒカルにも、激しい戦いが始まるのがわかったのだろう。

——地力じゃ勝てねえ。だからといって縮こまった手なんて見せられねえ。見ろ、佐為。これがいまのオレの碁だ！

左辺で激しい戦いが巻き起こる。

それは下辺をも巻き込んで、白黒の石が、死活定かならぬ混在状態で広がっていく。

——ははっ。この黒が死んだら即死だな……だが活かしてやる！

黒が生き残る筋道は見えている。

ここのヨミにはかなり時間をかけた。ヨミ抜けは絶対はない。

——つつても、戦場が広がりすぎたせいで右辺がずいぶん窮屈になっちまった。

盤面を俯瞰して、ゆかりは内心舌打ちする。

この攻防のワカレが黒得でも、地合いではまだ白が優勢だ。

戦局は、まだ佐為の手の内ということだ。黒はさらなる勝負を求め

られる。それを佐為は許すか。

——楽しい。

よろこびを、抑えきれない。

これが本気の佐為だ。進藤ヒカルが求めてやまなかった佐為の碁だ。

——だが、佐為。オレの中には、いまのお前が知らない佐為の碁が宿ってるんだぜ。

佐為が“sai”としてインターネットの実力者と打ち続け、磨き上げた新たな碁。

その佐為と一番多く、毎日のように対局を重ねて来たのは……進藤ヒカルなのだ。

——読みの深さじゃ勝てねえ。力戦でも勝てねえ。実力差は絶望的だ。けどな佐為。オレはお前の実力の、一番深いところを知ってる。秀策の棋譜を飽きるほどに並べた。お前とは毎日碁を打ち続けた。お前がいなくなつてからも、ずっとオレの中の佐為を追い続けた……だからな佐為。オレが一番お前を知ってるんだぜ。誰よりも。虎次郎よりも。いまの進藤ヒカルよりも！

マグネットの黒石が、碁盤を強く叩く。

この局面で、未来の佐為なら打つただろう、いまの佐為では届かない一手。

——見たか佐為。これが未来のお前だ！

半目差。

それが勝負の決着だった。

「……強え」

震えるような声で、ヒカルはぼそりとつぶやいた。

「いや、言っちゃなんだけど出来過ぎ。普段の実力の倍くらい出せた気がする。もうこんな碁は打てない……進藤くん強すぎ」

心身ともに消耗し尽くして、テーブルに突っ伏しながら、ゆかりは言葉を返す。

「ゆかり姉ちゃん、ほんと何者？」

「ははっ……本因坊秀策の生まれ変わり、って言ったら信じる？」

冗談交じりに返す。

秀策の碁そのものである佐為と一緒にだったのだ。間違っではないない。

「虎次郎の？ いや、違う。虎次郎の棋風じゃねえ」

佐為がそう言ったのだろう。ヒカルが頭を振る。

「だよー。じゃあその教え子ってことで……これからもよろしくね？」

信じられるとは思っていない真実を口にして。

ゆかりは疲れた顔に満足げな笑みを浮かべた。

この日ゆかりは門限を破って母に怒られた。

ラーメン屋で食事した後さらに一局打ったのだから当然である。

門限を破ったことより、どちらかというとな一人で夜道を歩いて

帰ってきた、その自衛意識の低さが母の怒りを買ったようだが。

だからといってヒカルに家まで送ってもらっても、それはそれで説教されてた気がする、とゆかりは思った。

当然である。

05 女子高生、結果を知る

佐為との勝負後、ゆかりは燃え尽きていた。

念願の対局が叶い、しかも我ながら最高とっていい出来。

その後のモチベーションが保てず、碁はぐっだぐだに崩れた。

「なあゆかり姉ちゃん、もういつかい！ もういつかい！」

反対に、やる気全開になったのはヒカルだ。

ゆかりと佐為の対局を、とにかく一局でも多く観たいらしく、対局のあいだも盤面を食い入るように見つめている。

「あの、ヒカルくん。うれしいんだけど、ここからもう一局打ってラーメン屋行ってたら門限が……」

「じゃあラーメンはいいから！」

「!?」

進藤ヒカルがラーメンをあきらめるといふ異常事態に、ゆかりは恐怖した。

ともあれ。

おかげで徐々に調子も上向き、自分の成長を実感しはじめたころ。

いよいよヒカルが待ちわびた海王中との対決——中学夏季囲碁大会が始まった。

といっても、あくまで中学の部活イベントだ。

一般女子高生のゆかりが紛れ込んで観戦するのは難しい。

というか、友人に相談したら「おまえそこまでやるのかシヨタコン極まってんな」みたいな目で見られたので、さすがに自重した。

そして大会当日。

囲碁サロンで働きながら、ゆかりは大会に思いを馳せる。

——いまごろヒカルたち、頑張ってるんだろなあ。

「アキラくん、中学校の囲碁大会今日よね。ああ、応援に行けたらよかったのに！」

市河さんも、乙女の表情でそんな事を言っている。

「この人とはいっしょにされたくない」と思うゆかりだが、はたから見れば弁護の余地なく同類である。

「そういえばゆかりちゃん。あれから碁の勉強はどうだい？　頑張ってるかい？」

店員がふたりしてぼうつとしてしていると、常連の北島さんが、ふいに聞いてきた。

「あ、はい。いっしょに打ってくれる友達がいて、もっぱらその子と」

ヒカルのことである。塔矢アキラにバレるので言えないが。

ゆかりの言葉に、北島さんはアゴに手を当て、機嫌よさげに目を細める。

「いいねえ。ゆかりちゃんくらいの年頃の娘さんが、碁なんてシブい趣味の仲間に困らないなんて、おなじ碁打ちとしてうれしくなる。なあ広瀬さん」

「そうですね、北島さん。なによりも、まずは相手が居ないと、碁は打てませんから」

「いいこと言うねえ。じゃあいい碁敵こかたぎと出会えたことを感謝して……もう一戦といこうか広瀬さん」

「望むところですよ、北島さん」

いい話になってしまっているが、ゆかりの相手は男子中学生であ

る。

だがゆかり自身は、それで話が台無しになるとは思っていないので、「そう、まずは相手が居ないと碁は打てないんだ……昔の塔矢や、佐為のように……」とか感慨にふけていた。

それから、午後の時はゆるやかに過ぎて。

大会の結果は、終了後、囲碁サロンにやってきた塔矢アキラにより、もたらされた。

海王中と葉瀬中の対戦結果は、全勝で海王中の勝ち。

これは、ゆかりが知る、かつての結果と変わらない。

だが、不思議と塔矢アキラの表情に、失望はなかった。

「進藤が言ったんです。『先にプロに行ってる。絶対追いつくから』って。正直、対局には戸惑いしかなかったけど、進藤はそう言うってくれました。だから市河さん。ボクは今年のプロ試験、受けるつもりです」

……あれ？ オレ昔そんな事言ってたっけ？

横で聞いていたゆかりは、盛大に首を傾げる。

いや、言っていない。絶対に言っていない。

というか失望して背を向けた塔矢に、なにか言えるような空気じゃなかった。

——おいおい、スゲエじゃねえかオレ。どんな魔法使ったら、塔矢をこんな笑顔にできるんだよ。

気になりすぎて、誰かくわしい話聞いてくれないかな、とゆかりはアキラの方をチラチラ見る。

市河さんがものすごい勢いで牽制してきた。



大会後、最初の対局の日。

待ち合わせの場所に駆けてきたヒカルは、悔しげに大会の結果を語った。

塔矢アキラとの対戦が気になって仕方ないゆかりが、くわしく聞き出そうとしたところで。

「ゆかり姉ちゃん……オレ、プロになる」

ヒカルは自分から、その話を始めた。

「——塔矢と約束したんだ。つぎの対局はプロの舞台でだって」

「まあヒカルくんたちの強さなら、そういう話になるのもわかるけど……ずいぶん唐突な話だね」

内心しめしめとほくそ笑んで、ゆかりは説明を求める。

「あっちの……海王中の先生がな、言ったんだよ。こんなところでモタモタしてるよりも、君たちはすぐにでもプロに行くべきだって。じゃあ次はプロで——って話になった」

ちよつと変だな、とゆかりはいぶかしむ。

ゆかりの時は、最初は佐為が打ち、途中からヒカルが出しやばって勝負を台無しにした。

似たような有様だったら、海王中の尹先生から「プロになれ」などとは言われなかっただろう。

——佐為が長く打ったか、それともヒカルがマシになってるのか。

どっちもありそうな話だと、ゆかりは考えた。

塔矢の事情はゆかりが教えたし、ヒカルが碁に本腰を入れたのはゆ

かりの時より半年は早い。

その結果いい感じの対局になって、大きくは評価を落とさなかった、というのが妥当なところか。

「なるほど……つぎの対局はプロでつてことなら、塔矢くんが今年のヒカルくんは来年のプロ試験を受けるの？」

「あ、プロ試験って一年に一回なんだ？」

オマエそこからかよ、と心中ツッコんだが、我が身を顧みて仕方ないかと思ひ直す。

そもそもこの頃のヒカルは、どうやったらプロになれるのかすら知らない。というか院生すら知らなかった。

「ちなみにヒカルくん。プロ試験ってどんな内容かわかる？」

「……教えて？」

てへ、とかわいく教えを乞うヒカル。クソガキである。

「予選を勝ち抜けた受験者による、約2ヶ月をかけての総当たり戦。合格するのはその上位3人。試験は夏に始まって、合格者が正式にプロになるのは春になるかな」

「げっ、じゃあ塔矢とプロで勝負するのは、早くて2年後!？」

「待ちきれないなら、塔矢くんといっしょにプロ試験、受ける？」

「……ダメだ。塔矢とはまだ戦わねえ。一年間みっちり鍛えて、プロになってやる」

塔矢を自然に上に置く発言は、微妙に失言っぽい。

まあ塔矢との戦いに負けてるので、流しても不自然じゃないと、ゆかりは指摘しないことにした。

「がんばって。わたしも手伝うよ。いつでも対局するし——なんだっ

たら毎日でも！」

「いや、その……オレ独学だったから、知らない人と打つ経験も積まねえとなーって……」

ゆかりがため寄ると、ヒカルは困ったように言い訳する。

それも当然か。ゆかりが相手だと、ヒカルは佐為に任せるしかないので、実践練習にはならない。

「じゃあ碁会所とか行ったり……院生目指したりする？ いや、ヒカルくんの実力で院生を『目指す』ってのも変な話だけど」

「インセイ？ たしかプロの卵って言ってたっけ？」

「そうそう。プロを目指してる子たちと打てるから、いい環境だとは思……院生になると中学含めてアマチュアの大会には出れないけどね」

「え、マジで？」

「うん。それに、院生は18歳まで。プロ試験の年齢制限が30歳以下だから、試験の時はそれくらいの年の人とも対局することになるかな」

「30とかオッサンじゃん！」

残酷なことを言う。

まあゆかりも椿のヒゲ面を見て、オッサンと思わない自信はない。

「まあどつちにしろ、つぎの院生の募集締切は8月末だし、それまでにどうするか考えればいいと思うよ。単純に強い人たちと打つだけなら、ほかにも方法があるし」

「え、ほんと？ ゆかり姉ちゃん、教えてくれよその方法！」

頭を悩ませていたヒカルは、ゆかりの言葉に身を乗り出す。距離が近い。

ゆかりは動じることなく、自信たっぷりに胸を張って。

「ヒカルくん、ネット囲碁、って知ってる？」

そう問いかけた。

この女、自室に男子中学生を連れ込む気まんまんであった。

06 女子高生、連れ込む

同じ週の日曜日。

ゆかりはヒカルを自宅に招待した。

この日のバイトは無理言って休ませてもらったが、かいつまんで事情を説明すると、市河さんにはむしろ応援された。

男子中学生を部屋に呼ぶことのどこに応援する要素があるのかわからないが、ともあれ都合はいいので、ゆかりは厚意に甘えることにした。

それはともかく。

ゆかりの部屋をひと目見て、ヒカルは歓声を上げた。

「うわ、本当にパソコンがある。それに碁盤や碁石も。すげえー！」

昔はもう少し女の子らしさの名残があった気がするが、部屋はすでに囲碁一色である。

おかげで友人を部屋に招いた時「女子高生の部屋か？これが……」とドン引きされたが大丈夫だ。犯罪者扱いじゃないだけいつもよりマシだ。

「ふふーん。なかなかでしょ？ さ、パソコンデスクに座って。説明するから」

そう言って、ゆかりはヒカルを椅子に座らせる。

それから、パソコンを立ち上げ、ワールド囲碁ネットにアクセス。

「名前は……とりあえずわたしが使ってるやつで入るね」

「『yukari』……ゆかり？」

「うん。名前はわりと好き勝手入れている感じ。わたしみたいに下の名前とか、イニシャルとか、アニメとかゲームのキャラとかバラバラ

……ほら、リストの名前見てみて」

「いやぱっと見わかんねーよ。英語だもん」

「わかる。ローマ字とつきに頭に入ってるこない」

低いところでわかりあっている中学生と高校生がいるらしい。

「——まあ相手は適当に選びましょうか。持ち時間はここで設定して……うん。オツケー」

試合をスタートさせると、早速相手が左下隅の星に石を置く。

「こんな感じでクリックして石を置いていって……マウス操作をしくじって別の場所に置いちゃわないように気をつけてね」

モニタの中の碁盤に、どんどん石が並んでいく。

「打つの早えな。早碁みてーだ」

「ゲームみたいなものだしね。こんな風に早い展開になることが多いよ。まあじっくり打ちたいなら、持ち時間を長めにすればいいと、思う、よつと」

「……なあ、これ相手強くねえか？ ゆかり姉ちゃんにぜんぜん打ち負けてねーんだけど」

「うん、強い。早碁なのに読みが的確で手順も正確。ひよつとしてプロかもね」

「え、プロともやれん——っ!? 騒ぐな佐為!」

プロと打てるという言葉に佐為が食いついたのか、ヒカルが悶絶する。

佐為の姿を想像して微笑みながら、ゆかりはスルーして説明を続ける。

「日本、海外問わずね。アマでも強い人多いよ……ただまあ、あくまでゲーム感覚だからね。手合みたいな真剣勝負の碁になることは少ないかな……ああ、ほら。踏み込みから形成悪くして白が大きく優勢に……ああ、中押し勝ちになった」

「さらっとプロに勝つのすごくねえ?」

「“かもしれない”だし、早碁だし……まあこんな感じで世界中の強い人と打てるから、ヒカルくんにもいい勉強になるんじゃないかな?」

ゆかりの言葉に、ヒカルはキラキラと目を輝かせる。

「うん、ありがとうゆかり姉ちゃん! 次はオレが打っていい?」

「どうぞどうぞ。名前変えるならログアウトして入り直すけど」

「せっかくだからそうしようかな。名前は……うん。s、a、i」と

「“s a i”? “h i k a r u”じゃないんだね」

「それじゃゆかり姉ちゃんとおそろいじゃん……テキストに漫画から取っただけ」

ゆかりが尋ねると、ヒカルはそんな風にごまかした。

「残念。おそろいにはなれなかったか——と、上手い上手い。そう、そこで設定して、スタートで」

「お、始まった。先番はオレ……行くぞ。右上隅小目」

対局は、中盤に差し掛かったあたりで形勢を覆すのは無理と投了してきて、中押し勝ち。

その後ヒカルは3度ほど対局して全勝。最後の対戦相手は一柳棋聖だった気がするが、ゆかりは見なかったことにした。

序盤の緩手が祟って最後まで挽回できずのいいとこなしに終わった一般通過棋聖は居なかった。いいね?」

●
夏休みに入った平日の昼間。

「ヒカルが来ない日もネット碁に勤しんでいたゆかりは、リストに“sai”の名前を見つけて苦笑した。

「あいつ、オレのところで打っただけじゃ物足りなくなって、他所でもネット碁始めたな？」

おそらく三谷のお姉さんがバイトしてるインターネットカフェだろう。

即座に対局を申請したが間に合わなかった。

「こんにやろめ。と、ゆかりは抜け駆けしたおじやま虫をにらむ。

「遠慮することないのに。別に休み中毎日来てても、迷惑どころか望むところだし」

まあ、母からはクドいほどに「犯罪は犯さないように」と釘を刺されているけど、風評被害である。

そんなことを考えている間にも、対局は進む。

対戦相手の腕は、そこそこ。情勢判断が正確だからこそ、あつというまに投了してしまった。

——強くなってる。

ネット碁を始める前の佐為よりも、明確に。

記憶にある未来の佐為の領域へと近づいている。

ゆかりとて、佐為との対局を重ねることで成長してきたつもりだ。だがネット碁を始めてからの佐為の成長速度は、ちよつと異常だ。

「……負けてられないな。よし、次はオレだ——ああ、ログアウトしちゃった!?!」

対局が済んだ“sai”に挑戦しようとしたところで、対戦相手の一覧から“sai”の名前が消えてしまった。

「まだ日も高いんだけど。もうちよつと打てよなー」

“sai”の消えた画面を指先でツンツンして抗議していると、唐突に対戦の申込み画面が開いた。

「——つと、ちようどいい。消化不良だからつき合ってもらおうか。相手は……“hikaru”? ひよつとしてヒカルか? ええい佐為を出せ佐為を」

文句を言いながら対局を始める。

たがいにゆるりと石を戦わせ、布石が形になり始めたあたりで、ゆかりは口を結ぶ。

「……いや、こいつヒカルじゃねえ。いくらなんでも強すぎる。實力は、フクくらいかな? ……というかひよつとして本人か?」

福井雄太。通称フク。

早打ちが得意な、院生1組の實力者。

手応え的には彼に近い。棋風に違和感を感じるが……

「いや、フクでもねえ。でも、どこかで見たことあるような……と、強いな」

ヨミが深い。攻撃が鋭い。

果敢に打ち込んでくるその様は……どこか佐為に似ている。

「……ダメだな。キレイになっちまいそうだ」

たしかに強い。実力で言えば文句なしの院生上位。ひよつとしたらトップクラスかもしれない。

“s a i”の碁を参考にしているのだろうか。棋風には佐為の色が濃く出ている……が、まだまだ研究が足りない。甘すぎる。

「佐為はそうは打たねえ」

踏み込んできた石をぶつちぎって、上辺の一団を巻き込んでコロす。

一刀両断。“h i k a r u”は挽回する手段を模索してか、ギリギリまで長考した後、やっと投了してきた。

終わってから、ゆかりは深く息を吐く。

「棋風をマネてくるヤツまで出てくるって……マジで“s a i”、話題になってたんだな」

“s a i”に関わる騒動について、ヒカルは後から知った。

プロもアマも巻き込んで、当時囲碁界で話題を席巻した、と聞いていたが……その兆候は、すでに出始めているらしい。

○

8月に入って、“s a i”は、ますます存在感を増している。

インターネットの囲碁関係のサイトでは、“s a i”の話題で持ち切りだ。

このぶんだとリアルの囲碁界も、さぞかし騒がしくなっていることだろう。

「“s a i”ならオレの腕の中にいるよ」

「むぎゆ。なに言ってるのゆかり姉ちゃん」

掲示板を見ながら自慢気に胸を張ると、ヒカルがジト目で突っ込んだ。

椅子に座るヒカルの後ろから、ゆかりがマウス操作しているの間違ってはいない。

正確には、佐為はヒカルの右側後方。ちょうどヒカルを挟んでゆかりの反対側にいるのだろうか。

「冗談冗談。でもほんとにすごいねヒカルくん。囲碁サロンでも、芦原さん……プロの人が、すごく強いやつがネット碁に居るって話してたよ」

「プロでまで？ マジで？」

「ま、話題が広まれば強いヤツが挑戦して来てくれるから、いいことなんじゃない？ “s a i”はプロの誰だ？ プロじゃないとしたらどこの何者なんだ？ みたいな話にはなりそうだけど」

「そっか……謎の最強棋士“s a i”。もつと広まるといいな！」

「うん。そのためには強い相手とどんどん打たないとね」

「——ああー！」

言って、ヒカルは再びワールド囲碁ネットを起動する。

その時、部屋のドアがノックされた。

ゆかりの母だ。おやつを持ってきたのだ。

この母、実の娘を信用しきれず、定期的に部屋の様子をうかがいに来ているのである。

「はいはい。いま開けるから」

ゆかりがドアを開けると、母は冷たいジュースとおやつをお盆ごと

渡しながら、顔を寄せてくる。

「あんた、人様の子を、しかも子供を預かってるんだから、お天道様に恥じるような真似はしちやダメだよ」

「しない。囲碁しかしてない。というか何回目？　なんでそんなに信用ないの？」

「我が娘が小学生と、バイトした金で遊んでると聞いたときの母の気持ちを持ちを200文字以内で答えよ」

箇条書きにするととんでもねえシヨタコン野郎である。

くれぐれも、と念を押す母親を追い出して、パソコンデスクにジュースとお菓子を並べると、ヒカルがはたと手を打った。

「そういえばさ。三谷の姉ちゃん、ゆかり姉ちゃんのこと知ってたぜ？」

「三谷って、囲碁部の子だよ？　その姉で、三谷……隣のクラスにそんな名字の子が居たような？」

ゆかりも、三谷の姉のことは覚えてる。

クラスメイトだったらすぐにわかっただろうが、さすがに隣のクラスだと自信がない。

「なんか、いろんな意味で問題ある子だから気をつけてねって言われた」

そりゃあかわいい弟の友達が、年上の女に狙われているとなれば、心配して忠告の一つもするだろう。

ゆかりにとっては心外すぎる話だが。

「ゆかり姉ちゃんの家に行くときは、必ず親に伝えて、帰る予定の時間もちゃんと saying おくこと。小銭は絶対持っておくこと。あと最寄

りの公衆電話と交番の位置も教えてもらった」
「心配の仕方がガチ過ぎる……」

そのレベルで警戒されていることに、ゆかりはちよつと傷ついた。

07 女子高生、奪われる

囲碁界が“sai”の話題に終始した夏も、もうすぐ終わる。

だが話題の当人はといえば、そんな様子も知らないまま、ゆかりと碁を打つ日々を送っている。

場所はいつもの公園……じゃない。

暑いのと、ちょうど気になるラーメン屋さんがあったので、その近くの喫茶店だ。

4人席にゆつたりと座り、碁盤をはさんで対局と検討を終えたふたりは、まったり雑談を始めていた。

「ふーん。じゃあ塔矢はプロ試験、まだ無敗なんだ？」

「まあ実力が飛び抜けてるからね。むしろ黒星ついたら、いったいなにが起こったんだってレベルだし」

話題はプロ試験を受けている塔矢アキラについてだ。

塔矢のホームである囲碁サロンに勤めているゆかりは、彼の情報に困らない。市河さんも居るし。

「……なあ、院生って弱えの？」

「そんなわけないでしょ。院生のトップともなれば、実力的には弱いプロとそう変わらないよ」

「だよなあ。塔矢のやつは、そんなヤツらでも蹴散しちまうってことか」

「当然キミも、なんだけどね」

そんな話をしていた時だった。

「——なんだと？ 聞き捨てならねえな」

とても馴染みのある声が、頭上から降ってきた。

振り向くと、間違いない。ゆかりの記憶よりいくぶん若い、かつての仲間——和谷義高がそこに居た。

なんでこんなところに、と思ったが、考えても仕方ない。

不機嫌絶頂といった様子の和谷は、ヒカルに視線を向ける。

「——そのチビが、院生なんか相手にならないくらい強いって？」

「チビじゃない！ 進藤ヒカルだ！」

「進藤……聞いたことねーな。塔矢はともかく、オマエも塔矢並に強えってのかよ？」

——マズいな。

ゆかりはひそかに眉をひそめる。

ここでヒカルが佐為に打たせる展開は悪手だ。

なにせ和谷はヒカルと同期のプロになるのだ。

対局の機会も、観戦する機会も、無数にある。

いま佐為と打ったら、ヒカルの素の実力とのギャップに不審を抱く可能性は高い。

かといって、いまのヒカルの素の実力は……

同時期のゆかりだと、ようやく三谷と勝負になり始めた程度。

それよりは相当上だろうが、それでも院生トップクラスの和谷相手には歯が立たない。

——仕方ねえ。オレが矢面に立つか。

そう決めて、ゆかりは和谷に向けて言い放つ。

「——ヒカルくんは強いよ。それこそ院生じゃ勝負にならないくらい」

「なんだと？ というか、てめーはてめーで誰だよ」

「ただの女子高生だよ……キミよりはよっぽど強いけど」
「言ったなおい！　そこまで言うなら勝負しろ！」

狙い通り、挑発に食いついてきた。

口元を隠すように開いた白扇子の下で、ゆかりはほくそ笑む。

「いいよ。ここでやる？　それともどこか碁会所行く？」
「ここで十分だ！」

怒り顔の和谷は、ヒカルを席の端に押しやって、どつかと座る。
ニギって、結果は和谷の先番。

小さな碁盤に、マグネットの碁石が打ち付けられる。

怒りで冷静さを欠いたのと、ゆかりの予想外の手強さに焦ったため
だろう。

和谷の打ったマズい手を咎め、大勢を決するのに、それほど手はか
からなかった。

負けて、頭が冷えたのだろう。

和谷は深呼吸してから、頭を下げた。

「負けました……すまん。口だけじゃねえ。あんたは強い——だが、
ナニモンだ？　プロじゃねえよな？」

「言ったでしょ、ただの女子高生だって。名前は日宮ゆかり」

「日宮ゆかり……ゆかり……？　なあ、ひよつとしてだけど、ネット碁
やってたりしないか？」

「ワールド囲碁ネットの高段位帯で、ローマ字で“yukari”な
ら、たぶんわたしだと思うけど」

「どうりで……冴木さんもヤラれてる相手なら、この強さも納得だ」

どうやら、ネット碁で対戦した相手に、同門の先輩でもあるプロ棋
士の冴木さんがいたらしい。

「――あらためて、すまない。プロ試験中でちよつと神経質になつた。迷惑かけたな。お詫びになにかオゴらせてくれ」

ゆかりとしては、そこまでしてもらうのも気が引けるのだが、この言葉にヒカルが目を輝かせた。

「ほんとに？　じゃあオレラーメンがいい！」

「おまえな、頼むならフツーこのメニューだろ……あー、わかつたわかつた。ラーメンだな？　日宮さん、も、それでいいのか？」

「もちろん。わたしもラーメン好きだから、気を使わなくてもいいよ」

そう言つて、ゆかりはえっへんと胸を張る。

「なら移動するか。この近くにラーメン屋あるけど、そこでいいか？」

「もちろん　オレたちそのために来たんだ！」

和谷が席を立つと、上機嫌のヒカルが続く。

――なんかオマエら仲良くなるの早くねえか？

そんなことを思いながら。

ゆかりは伝票を持って、あわててふたりの背を追いかけた。



「え、じゃあ次の日には、また和谷くんと会つてたの？」

和谷に奢ってもらつた、しばらく後。

ネット碁をやるため、ゆかりの家に来てきたヒカルは、真つ先に、

和谷と会ったことを報告した。しかもうれしそうに。

「ああ。駅で待ち合わせて、それからいつしよに碁会所に行って対局して……碁会所のおじさんたちとも打ったよ！　こういうところで緊張するのなら、場慣れしたほうがいいって」

ゆかりは心のなかで歯噛みした。

たしかにゆかりも、プロ試験の時、初めて椿やおじさん連中と対局して、いつもの碁が打てなくなってしまった。

そこを鍛えてくれるのは、正直ありがたい。前世に続いて、ヒカルの世話を焼いてくれる和谷には、感謝すべきかもしれない。

——でも、ぜんぜん腑に落ちない。ヒカルの面倒はオレが見てたのに……和谷あ！

「それから、次の日にも会って、その時は伊角っていう高校生のにーちゃんといっしょだったな。伊角さん、院生のトップクラスでつえーんだぜ！」

——伊角さんとも……和谷あ！

たしかにヒカルには、素のヒカルの实力を知る碁打ち相手が必要だ。

以前院生を勧めたのもそれが理由なのだが、棋院の外でまで打つとなると話が違う。ゆかりが佐為と打つ機会が減ってしまう。それはイヤだ。

感謝はあるが、恨みも深い。

和谷にどういう感情を向けたらいいかわからなくて、ゆかりは心のなかで叫ぶしかない。

「和谷たちには院生の話をイロイロ聞いたけど……やっぱプロの卵だ

な。オレ、プロのこと全然知らなかったよ」

——和谷あ！

「でも、和谷や伊角さんと打てるなら、正直院生にはなんなくともいいかって思うんだよな。和谷のやつ、また強いヤツ紹介してくれるって言うし」

「ソウカナ。その強い子たちとは棋院で打って、空いた時間はわたしと打ってくれたほうが、お姉さんウレシイカナ」

ちよつと顔をひきつらせながら、ゆかりは厚かましいことを要求する。

笑顔で流されたが。

「まあ、院生になるにしても、12月の募集だな。和谷に話聞きながら、ちよつと考えてみる」

——和谷あ！ オレに知恵つけすぎだ和谷あ！

そのうち逆に教えられる立場になるんじゃないかと、ゆかりは恐怖を覚えた。

年下の自分にモノを教わっている姿は、想像するとダメすぎる。

「……そういや、ゆかり姉ちゃんってプロになんねーの？ 和谷言ってたぜ。ゆかり姉ちゃん塔矢並につえーって」

と、そんなことを、ヒカルは尋ねてきた。

この時点の——まだトッププロとの対局経験もない塔矢と同格扱いはちよつと不満ではあるが、プロになってないのがおかしい類の人数種ってことだろう。

だけど。

「わたしはプロにはならないよ。ずっとヒカルと打ってたい」

ゆかりは想いを伝える。

プロを志す者たちに、そしてプロ棋士に、自分が混じるわけにはいかない。

これからヒカルはプロへの道を歩み、佐為が他人と打つ機会はほとんど減っていく。

そんな佐為のことも考えずに。「ヒカルと打ちたい」って、「私はもう消えてしまおう」と必死に訴えかけてくる佐為を、進藤ヒカルはぞんざいに扱ってしまった。

——今度は、そうはさせねえ。オレは最後まで、佐為と打ってやれる存在になる。

ゆかりは決意を胸に秘める。

そのためなら、日宮ゆかりはプロには執着しない。少なくとも佐為が消える、その時まで。

最近母親の、将来どうすんのって圧が強くなってきたけど。おバカすぎて行ける大学みつかんないけど。

……オレの将来も、なんとかならないかなあ。

動揺を隠すためか、母が持ってきたジュースをあわてて飲む、ヒカルの姿をながめながら。

ゆかりは心のなかでボヤいた。

08 女子高生、応援される

「そういえば、この間芦原先生から聞いたんだけど……ゆかりちゃん、すごく強いんですって?」

夏休みも終わった、ある日曜の昼下がり、囲碁サロンにて。

市河さんは、邪気のない笑顔で、唐突に——そんな爆弾を投下した。

「市河さん! ちょっと! その話は! 別の場所で!」

マズイと思い、ゆかりはとつさに市河さんをスタッフルームに連れ込む。

「ちよ、急にどうしたの、ゆかりちゃん?」

「市河さん、その話……どこまで知ってるか、聞かせてもらっていいですか?」

戸惑う市河さんに、ゆかりは距離を詰めて問う。

芦原さんから聞いた。ということは、間違いなく和谷↓冴木↓芦原のラインだ。

和谷はゆかりとヒカルがよく対局していることを知ってるから、伝わっているとしたら、それだけは口止めしないとマズい。

「えーと、ゆかりちゃんが院生やプロに勝てるくらい強くて、アキラくんが気にかけてる進藤くんと頻繁に打ってるくらい?」

「オーケー、とりあえず芦原先生の口は封じておくとして……ヒカルくんとのことは、他言無用で、どうかお願いします」

ずい、と距離を詰めながら、ゆかりは頭を下げる。

その必死さに、市河さんは戸惑いを隠せない様子だ。

「な、なぜって聞いていいかしら？」

「別にヒカルくんと友達だつてのはいいんです。でもわたしがヒカルくんと頻繁に対局してることがバレたら、塔矢くんがどうなってしまうか、恐ろしくて」

ゆかりの時と違い、いまの塔矢アキラは、すでにヒカルをライバルと見定めている。

それは普段から態度に出ているし、ヒカルがプロになるまでお預けになった、対局の時が訪れるのを、今日か明日かと心待ちにしている。そんな彼が、ゆかりとヒカルがしょっちゅう対局してる事を知ったら……想像して、ゆかりは身を震わせた。怖い。完全にダメなやつだ。

理由を説明すると、市河さんは納得したようにうなずいた。

「ああ。アキラくん、あの子にご執心だものね……わかったわ。アキラくんには黙っておくから」

「ありがとうございます。さつきはあわてちゃってごめんなさい」

ゆかりは安堵した。

どうやら穏便に済みそうだ。

胸をなでおろしていると、市河さんは、菩薩のごときほほ笑みを浮かべた。

「大丈夫よゆかりちゃん。私応援してるからね」

「なんのですか!？」

とんでもない誤解をされた予感に、ゆかりは全力で突っ込んだ。



それから。

プロ試験が終わり、塔矢アキラの合格が正式に決まると、囲碁サロンは祝福ムード一色になった。

塔矢行洋が経営する碁会所とはいえ、小さい頃から囲碁サロンに通い詰めていた塔矢アキラは、常連にとって「我らが若先生」。皆のよろこびもひとしおだ。

「そうですか。塔矢くん、もうプロ棋士になるんですか」

皆が喜ぶ片隅で、ゆかりも感慨にふける。

塔矢アキラがプロ棋士になり、来年には進藤ヒカルも続く。

当面は棋士にならないと決めた以上、仕方のないことだが……ふたりが遠くへ行ってしまふ寂しさは、どうしても感じてしまう。

「ゆかりちゃん、なんだか複雑そうね」

そう言う市河さんも浮かぬ顔をしているが、理由は絶対に違う。

どうせアキラくんが遠い存在になって、いまみたいな親しい関係でいられなくなるかも、とかそんなやつだとゆかりは確信している。

「いえ、おめでたいですし、お祝いしなきゃですけど……なんというか、中学生の塔矢くんはもう就職先が決まってるのに、わたしは、と思うと、手放しではよろこべないっていうか」

「そういえばゆかりちゃんも、もう高校2年生か。進路のこと考えなきゃいけない時期だものね。進路は大学志望？」

「いえ……わたしちよつとお馬鹿なので……」

ずーん、と沈むゆかり。

柔らかく言っているがちよつとではない。

「で、でもまだ2年生なんだから、いまから勉強頑張れば……」

引きつった笑みで励ます市河さんだが、ゆかりの勉強できなさを見くびっている。

「高校に受かったとき、周りから奇跡だって言われました。高校に入ってから似たようなあつかいで……お母さんには、あんたお馬鹿なんだから、家事とか料理だけは頑張りなさいって言われて、かなり厳しく仕込まれてます……」

「すでに花嫁修行を……あ、じゃあ進藤くんと仲良くしてるのって……!」

「違います! とんでもない誤解です!」

ものすごい風評被害が生じそうになったので、ゆかりはあわてて否定する。

さすがに結婚相手を小学生のころからロックオンして将来の旦那に……とかいう女版光源氏みたいな評価はごめんである。

だが市河さんの視線は仲間を見るそれだ。おまわりさんこっちはです。

「就職先を探してるなら、ゆかりちゃん。よければ塔矢先生に相談してみてくださいようか?」

「え、いいんですか市河さん!」

ゆかりは食いついた。

市河さんが妙に優しいのが気になるが、願ってもない話だ。

「ええ。あいにくこの人手は増やせないけど、先生ならお顔が広いから」

「あ、囲碁サロンは無理なんですね」

「フルタイムとなるとなかなかねえ……たとえばわたしがアキラくん

と結婚して寿退社して、とかなら可能性はあるけど」

仮定が厚かましい。

ひよつとしてそれは無理なやつでは、と思ったが、ゆかりは賢明にも口にしなかった。

そんな風にふたりで話していると、ひよこりと。

常連の広瀬さんが首を突っ込んできた。

「ゆかりちゃん。よければ私がいい人紹介してあげようか？ ゆかりちゃんくらい気立てがいい子なら、紹介する相手に困らないですし」

まるで紹介する相手に困る人間がほかに居るような口ぶりだと思っただが、ゆかりは賢明にも問いたださなかった。

「いえ、ありがたいんですけど、いまはほかに見ていたい子が居るの
で」

即答だった。

広瀬さんは、ゆかりと市河さんを交互に見て、残念そうにため息をついた。残念な生き物を見る目だったかもしれない。

一応、弁護の余地はある。

大前提として、ゆかりは「佐為と碁を打つ」ことを悲願としていて、他に目を向ける暇がない。

それ以前に男女のつき合いというものが、いまいちわからない。そもそも恋愛に関してそこまで情緒が発達していない。

だが、それを抜きにしても。

その誤解しか生まない言い方は大問題である。

○

「それで、和谷たちと碁会所で団体戦してさ。負けたら碁石洗いで、相手に石を置かせて！」

塔矢アキラの合格が決まった、しばらくあと。

対局後のラーメン屋で、興奮気味に語るヒカルに、ゆかりはうんうんとうなずく。

「そりゃあヒカルくんと院生の子だもんね。碁会所で一番強い人たちでも、置き石がないと勝負にならないか」

「その時に行った碁会所——道玄坂ってところで、席料タダで打たせてもらってるんだ！ オレと打ちたい人多いからって！ 多面打ちとか、持碁狙いとか、いろいろ面白いこともやったぜ！」

「それは楽しそうだね。それにいい席亭せきていさんだ。いいご縁が出来てよかったねえ」

ゆかりの時も、似たようなことがあった。

もつとも、時期を考えれば、半年以上前倒しになっているが。

それがいい影響になってくれるといいんだけど、とゆかりは思う。

すでに進藤ヒカルは、ゆかりとは違う道を歩んでいる。

囲碁に本腰入れだしたのも半年は早いし、この時期に院生や碁会所のおじさんたちと対局しているなら、成長もゆかりのときよりずいぶん早いはずだ。

ただ、ヒカルのいまの強さを、ゆかりは知らない。

気にはなるが、佐為と対局し続けるためには、知ってはいけないことだ。

もちろんゆかりも、プロ棋士を目指すヒカルのことは応援してるし、できる限り協力はしたい。

だから、院生の和谷が、なにくれとヒカルの世話を焼いてくれることには感謝している。それはそれとして、妙な納得のいかなさはあるけれど。

——碁を打つだけが練習じゃない。オレだって、いろいろとヒカルの役に立ってるから！ 負けてないから！

「あ、ヒカルくん。お冷おかわりする？ コーラ飲みたかったら頼んでいいよ。」

対抗意識から、普段よりもヒカルの世話を焼いてしまうのは、ゆかりにとって仕方がないことなのかもしれない。

そして。その光景が怪しく見えたラーメン屋の店主が、そろそろふたりの関係について尋ねるべきだろうかと迷うのもまた、仕方がないことだった。

09 女子高生、見つめ直す

年が明けて、塔矢アキラの新初段戦の相手が決まった。逆コミのハンデ付きとはいえ、ライバルと現役のトッププロとの対決だ。ヒカルも興味津々だった。

「新初段戦、塔矢くんの対局相手は座間王座……って、ヒカルくんわかる？」

「和谷に聞いたたら『お前座間王座も知らねえのかよバカヤロー！』って怒鳴られたよ」

場所は喫茶店。

小さな碁盤を挟んで、ゆかりとヒカルはおしゃべりする。

「はは、ヒカルくんらしい……ちなみに王座ってわかる？ 棋戦とか」

「ああ。怒鳴られた後、和谷が教えてくれたしな」

和谷様々と言うべきか、和谷ア！ と叫ぶべきか。

自分よりヒカルのお世話が上手い和谷に、ゆかりは内心複雑だ。

「でもゆかり姉ちゃん、プロに興味ないわりにはよく知ってるよな。そういう話どこで聞いてんの？」

「碁会所でバイトしてるからかな？ あそこでお客さんの話聞いと、自然とその手の知識はついちゃうから……」

「ああ、碁会所のおっちゃんとか、別に自分がプロってわけでもないのに、スゲエくわしいもんな」

ゆかりの説明に、ヒカルは納得したようにうなずいた。

実はゆかりは、ヒカルに説明するためにも、専門の雑誌や新聞なんかで囲碁界をチェックしてる。

ただ、プロになるヒカルが、「自分の棋譜をゆかり姉ちゃんに見られたらどうしよう」と心配しないよう、興味なさげに振る舞っているのだ。

「そういえばヒカルくん。塔矢くんもいいけど、まずは打倒海王中じゃない？ 院生をあきらめてまで選んだ悲願なんだし」

「いや、院生はあきらめたというか、あんま必要だと思わなかったっつーか……」

ヒカルは微妙そうに答える。

院生トップクラスの連中と交流あるからか、本当に院生への関心が薄い。

それでいいのかと、ゆかりは不安になるが、ヒカルのほうはどっしりと構えたものだ。

「でも、打倒海王中は順調だぜ。三谷は碁会所通いでずいぶん腕を上げたし、海王の相手が去年並なら、夏季大会にはいい勝負になってるはずだ」

部活に関しても、ヒカルは自信満々だ。

話が本当なら、三谷はすでに海王の副将相手に迫る実力。

となると、大将のヒカルが負けることは考えにくいから、残る問題は三将だ。

「でも、部長の筒井くんは今年で卒業なんですよ？ 新しく三将になる夏目くんはどう？」

「あー、夏目な……いちおう、三谷が面倒見てくれてんだけど……」

ゆかりが尋ねると、ヒカルは一転気弱になる。

まあ、夏から囲碁を始めて、半年も経っていないのだ。

海王と戦えるレベルまで上達しろというのも無茶な話だろう。

「なら、三谷くんを集中的に鍛えたほうが、まだよさそうだよね……と
なると、夏目くんに時間を取らせるのはもったいないんじゃない？」
「だよな。筒井さん……には、あかりたちの面倒見てもらってるしな
あ」

「手が足りないなら、三谷くんか夏目くん、わたしが面倒見ようか？」
「え——だ、ダメ！ それは絶対ダメっ!!」

ゆかりの提案を、ヒカルはあわてた様子で却下する。

急に取り乱したのを不審に思って、ゆかりは小首を傾げた。

「なんで？ 週イチくらいなら時間取るよ？」

「だったら、その分オレにつき合ってよ！」

「いいの!? ——じゃない。それだと夏目くんの問題が解決しない」

ガタツと立ち上がったから、気づいて自重する。

「大丈夫だよ。葉瀬中の問題なんだし、オレたちでナントカするから
！」

「……大丈夫？ 無理してない？ 気を遣わなくても、わたしならい
つでも喜んで協力するからね」

心配になって、距離を詰めながら尋ねている途中で、ゆかりは遅れ
ばせながら気づいた。

——あ。これ、オレのことが部員のみんなにバレるの嫌がつてるん
じゃ……

たしかに中学生のヒカルにとって、高校生のお姉さんとの関係を変
に詮索されるのは、わずらわしいに違いない。

とくにあかりは絶対に問い詰めてくる。

根掘り葉掘り、微に入り細に入り……これはめんどくさい。
まあ、これに関してはヒカルの意思を尊重するかと、ゆかりは決めた。

「とにかく、ゆかり姉ちゃんは楽しみにしといてくれればいいの！
夏の大会では絶対勝つから！ 葉瀬中メンバーで海王中を叩きのめして、オレはプロに行く！」

「おー！」

勢いで誤魔化すつもりなのか、ヒカルは力強く宣言し。

ゆかりもつき合って、天に向けてぐーをつき上げた。

騒がしいと店の人に怒られた。



塔矢アキラの新初段戦は、座間王座の勝利に終わった。

その翌週。

恒例の対局の日だが、今日ばかりは、ヒカルの興味は新初段戦にしかない。

喫茶店に来てすぐに、ヒカルは対局を観戦した和谷に教えてもらったという、塔矢アキラ対座間王座の棋譜を、小さな碁盤に並べていく。

「……ここで塔矢が投了だ。ゆかり姉ちゃん、どう思う？」

なつかしい対局だと、ゆかりは思った。

ゆかりの時は、日本棋院でモニタ越しに観戦していた。

塔矢アキラが佐為以外に負ける姿を見た初めての、だけど、見ていてワクワクした対局。

あの頃より成長した目で見ると……塔矢アキラの碁が、より深く理解できる。

「すごいね。座間王座相手に手を縮こまらせず、めいっばい攻めた。しかもそれが無謀じゃない。たしかな力に裏打ちされた攻め……–とはいえ、最後には地力の差が出たって感じかな」

盤面をにらみながら、ゆかりはつぶやく。

考えることしばし。座間王座の手抜きを許した左下隅への一手。

一気に形成を悪くしたそこからの、挽回のスジをヒカルに示しつつ、また言葉を続ける。

「負けたとはいえ、トッププロ相手に終始攻めたい一局だね。塔矢くんの、プロになるって気概が感じられる」

「プロになる、気概？」

よくわからないのか、ヒカルは首を傾けた。

ゆかりは苦笑しながら説明する。

「プロになれば、棋譜を人に見られる。一打一打に、見る者を納得させる説得力が求められる……塔矢くんは、逃げなかった。格上の強者をまっすぐに見据えて、目をそらさなかった。前に向かって進み続けた。それが塔矢アキラ新初段の碁だと、見る人みんなに示した」

血が熱くなっているのを感じて、ゆかりは心を鎮める。

塔矢アキラと向き合うのは進藤ヒカルだ。日宮ゆかりじゃない。

——大丈夫。そのかわり佐為はもらっていくから。

自分に言い聞かせて、ゆかりは心を落ち着ける。

だが視線の先に居るのはヒカルなので、獲物を狙う目で少年を見る女子高生の凶になっている。はよ来いおまわりさん。

「塔矢の碁か……」

ヒカルはつぶやいて、手の中の、マグネットの碁石をじっと見つめる。

「オレの碁は……」

ヒカルの独白に、ゆかりは思い出す。

かつて北斗杯で高永夏コヨンハに告げた、自分が碁を打つ理由を。

遠い過去と、遠い未来を繋げるために、進藤ヒカルは碁を打つ。

では日宮ゆかりは？

考えて、変わっていないと気づいた。

遠い過去左の凄さを遠い未来ヒカルに伝えるために。

自分の中で育てた未来の佐為の碁を、いまの藤原佐為に伝えるために……日宮ゆかりは碁を打っている。

——佐為が消える、その日まで。

ゆかりは白扇子を握りしめる。

今回も、佐為が消えるとは限らない。

だが、佐為は今回も塔矢行洋との対局を望み……消えてしまうのではないか。ゆかりには、そんな予感がある。

止められない。

塔矢行洋との対局は、佐為にとって今生の悲願だ。

佐為がどれだけ塔矢行洋にこだわったか。佐為がどれだけ塔矢行洋と戦いたがったか。日宮ゆかりは知っている。

——だから、オレは佐為を止めない。

そのかわり……ゆかりは心の中で決意を口にする。

——オレが佐為と、いくらでも打ってやる。今生で、思うさま碁を打って……最期の時に、楽しかったって、笑ってくれくらいに。

熱い視線を、そこにいるだろう佐為に向ける。

そうやって、はじめて。

日宮ゆかりは、自分のために歩み始めることができるのかもしれない。

10 女子高生、訪ねる

春が訪れる。

葉瀬中学では筒井部長や加賀が卒業し、ヒカルは2年生になった。ゆかりはいよいよ高校3年生。最終学年になる。

海王中との対決に向けて、ヒカルは新入部員集めや部員の特訓に余念がない。

そのあおりで、ゆかりがヒカルと出会う時間が減ったのだが、ゆかりとて、嘆いている場合ではない。

「――面接、ですか？」

日曜日。囲碁サロンでの勤務中。

市河さんに告げられて、ゆかりはオウム返しに尋ねた。

「前にゆかりちゃんに就職先のことを、塔矢先生に相談してみるって話してたでしょ？ 一度面接したいってことで……明日なんだけど、大丈夫？」

「は、はい。塔矢先生がお忙しいのはわかってますし、お時間いただけるだけで……」

「うん。なら学校には、私が迎えに行くから」

「ありがとうございます……あ、あの、わたし、スーツとか持ってないんですけど」

「学校に迎えに行くって言うてるでしょ。ゆかりちゃんが学生だって先生もご存知だし、制服で大丈夫よ」

あれよあれよという間に、翌日。

市河さんの車に迎えられて、たどり着いた先は……見覚えのあるお屋敷だった。

「あ、あの……面接は囲碁サロンでじゃ……」

「それが塔矢先生、急な来客で家を離れられなかったらしくて……じゃあゆかりちゃん。帰りの足は、先生が用意してくれるみたいだから。がんばってね！」

「え、待って、市河さん!? 市河さーん!?!」

励ますだけ励まして、市河さんは行ってしまった。

置いていかれたゆかりは、去ってゆく車を呆然見送ってから。

ままよと、塔矢家の門を叩いた。

家に招き入れられ、案内された先は、庭に面した純和風の座敷。

入ってきたゆかりを迎える形で、塔矢行洋は、碁盤を前に座していた。

「お、お邪魔します。お世話になります。日宮ゆかりです」

「よく来てくれた。話は市河くんから聞いている。まずはキミの実力を知りたい。座りたまえ」

——これ前にもあったー! というかどんな伝え方したの市河さーん!?!

心のなかで悲鳴を上げるが、もうすでにいろいろ尋ねる雰囲気じゃない。

碁盤の前に座る。

碁笥の蓋は開いていて、そこに入っているのは黒石。

置き石の指示はないので、ゆかりが先番で打てということだろう。たがいに挨拶して、礼。

——どうする?!

白扇子を手に握りながら、ゆかりは自問する。

相手は佐為クラス。とはいえ佐為と本気で戦った、あのときのよう

な精神状態にはなれそうにない。

——というかオレ、塔矢先生とともに打つの初めてじゃねーか!?

打つ機会は何度かあった。

最初は、囲碁サロンで。

塔矢アキラを負かした、その実力を量るために。この時は数手打つて逃げてしまった。

二度目が幽玄の間での新初段戦、三度目がネット碁での対戦。すべて佐為に任せて、自分では打っていない。

塔矢行洋と打つことに、不思議と忌避感はない。

それは進藤ヒカルだった頃に感じていた、ともに佐為の強さを追っている、仲間意識ゆえかもしれない。

なにより、塔矢行洋がゆかりを自宅に呼んだのは……塔矢アキラにゆかりの碁を見せないための、配慮じゃないかと感じた。

——だったら、信じて打つ。よく考えれば望むところだ。オレは塔矢先生と戦って……その強さを、手に入れてやる!

大きく、息を吐いて。

それから大きく息を吸って。

ゆかりは、右上隅星に、黒石を打ち付けた。



塔矢行洋は、あくまでゆかりの筋を見るつもりだったのだろう。

序盤の進行に、問いかけるような一打が混じる。それに今後の展開をにらんだ手を返しながら、盤面は穏当に進む。

だが、布石の段階での一打が、次第に存在感を増し始めたあたりで、雰囲気が変わった。

ゆかりの実力を認め、本気の碁を打ち始めたのだろう。塔矢行洋は一手に時間をかけはじめ、静寂とともに空気が重く沈んでいく。状態は、次第に悪くなっていく。

塔矢名人の序盤の手控えのお陰で、なんとか優勢は保っているものの、対面する塔矢行洋の無言の圧力が、ゆかりの打つ手を重くしている。

——息苦しい……まるで水の中だ。

動きが鈍る。

呼吸がか細くなっていく。

だが、思考は緩めない。

白扇子を握りしめながら、盤面を凝視して、無数に枝分かれする展開を予測する。

——いまの塔矢先生は、佐為を知らねえ。

白模様の渦中に黒石を叩き込みながら、ゆかりは心中で吠える。

——だったら、オレにも勝機はある！ 気後れすんな！

潜る。

溺れるのではなく。

塔矢行洋の大海の如き圧力の中に。19路の碁盤の中に。

——思い出せ！ 佐為と塔矢先生の対局を！ あの時、対局の一番真ん中に居て、その最深を覗き込んだ、あの感覚を！

藻掻く。潜るために。

思考をフル回転させながら。

盤面の奥底を覗き込みながら。

かつて一度触れただけの、おぼろげな感覚を頼りにして。思考以外の、ありとあらゆる感覚を投げ出して——ついに、届いた。塔矢行洋の意思が伝わってくる。

大模様に打ち込まれた。無理にコロすより、攻めながら上辺をニラむ厚みとするか。

——だろうな！ そうされると打ち込んだ旨味が少ない！

だが手抜きすると一手足らずでコロされる。

上辺の攻防で先手に回られる。そこで応手を間違えなければ……全体で黒がやや損。数目を争う情勢になる。

——攻防を、下辺に誘導……できるか？ いや、その先を読め！

塔矢先生よりも深く！ もっと深く！

塔矢行洋が、打ち込まれた黒石を攻める。

ゆかりが、白石に応じながらコロしあいを演じ……死活が定まった、その代償にもぎ取った先手で、上辺を押しつぶさんと白石が黒の模様突き刺さる。

塔矢行洋にとって思い通りの展開。

でありながら伝わってくる、わずかな困惑の意思。

そう。現出した石の流れは、塔矢行洋の狙いとは微細にズレている。

先のワカレはゆかりにとってやや損な、しかし、いまの局面にはわずかに有利な。

新たに読み筋を生じさせ、塔矢行洋の思考に負荷をかけながら、ゆかりは白扇子に指を沿わせる。

——佐為なら……そう、こう打つはずだ！

キビしい手には、よりキビしい手を。

塔矢行洋の打ち込みに、ゆかりは迷わずハサミツケた。ぶつかりあった黒白の石の働きが勝敗を決する。

その一手は塔矢行洋の進行を外し……ヨミの深さだけが頼りの、ノーガードのたたき合いが始まった。

伝わってくるのは、歓喜。

表情は巖のよう動かさぬまま、塔矢行洋は、強烈な一打でそれを示した。

最終的に、ゆかりは2目、届かなかった。

だが名人、塔矢行洋の心胆を寒からしめるのに十分な対局だった。

○

「――予想外の、だが素晴らしい一局だった」

対局を終えて、塔矢行洋はどこか満足気に語る。

「これほどの打ち手とは思わなかった。勤め先と聞いて、2、3当ては有ったが……よければうちで面倒を見よう」

一方、ゆかりは消耗しきっている。

両手を畳についてなんとか身体を支えながら、行洋の不穏な言葉に思わず確認する。

「あの、うちってのは、先生のお宅じゃなくて、囲碁サロンのことですよね?」

「キミが望むのであれば、内弟子なり家政婦なり、なんらかの名目で迎えてもよいが」

「望んでません。囲碁サロンがいいです。あそこが好きです」

市河さんに殺されそうなことを提案されて、ぶんぶん首を横にふ

る。

とはいえ、就職口が、なんだかゆかりの望むところに落ち着きそうなので、ちよつと安心してしまふ。

だが塔矢行洋は、碁盤に目を落としながら、静かに口を開く。

「少し聞いてもいいかね。キミほどの碁打ちが、なぜプロを目指さないのだ」

はつとするような問い。

思わず身をこわばらせると……初めて、塔矢行洋の口元がやさしく緩んだ。

「心配しなくていい。これに答えないからといって、話を反故にするようなものではない。嫌ならば答えなくていい」

ゆかりは迷った。

厚意に甘えて言わずに済ませる方法もある。

だが、ほかの誰でもない。塔矢行洋になら、秘密の一端くらいは、うち明けてもいい気がした。

「……たとえば、おなじ扇子の表と裏。そんな碁打ちが居ます」

手に持つ白扇子をぱつと開いて。

ゆかりは、静かに語りだした。

「表と裏は、いっしょには存在できない。すくなくとも、表が日の当たる場所で打つなら、もう一方は日の下には居られない……わたしは、そんな裏の碁打ちが、遠慮なく打てる相手でありたいんです」

「……そのためには、プロの立場にはこだわらない、か」

塔矢行洋は独白する。

この告白は、いまの彼にとって意味の通らぬ話だ。

だが、行洋は静かにうなずいて、ゆかりの言葉を噛み締めた。これで、本当に面接は終わった。

タクシーを呼ぶ間の待ち時間、ゆかりはふと気になって尋ねる。

「そういえば市河さんは、わたしのこと塔矢先生になんて話したんです?」

「ふむ……囲碁サロンのアルバイトの高校生が、就職先を探しているので、どこかいい働き口がないか。その娘はプロ顔負けの碁打ちなので、それも考慮してあげてほしい、だったかな?」

就職に重点を置くなら、彼女は必要なことを語っている。

それに、相手は口の固い塔矢行洋だ。なら、市河さんにそこまで非はない。

ただまあ、心の準備無くつれてこられて、死ぬほど肝が冷えたので……就職祝いも兼ねて、なにか美味しいものもおねだりしてみようと、ゆかりは思った。



タクシーで送ってもらい、帰宅後。

あらかじめ事情を話していた母に、本日の首尾を報告すると、母は喜色をあらわにした。

「いろんな意味で将来を心配してたけど……囲碁が趣味でよかったねえ」

手放して喜んでくれたのは、正直ゆかりもうれしかったのだが。続けて母は、こうも言った。

「そろそろゆかりも大人なんだし、そこまで一途なら、しつこく言う気はないけど……ヒカルくんが18歳になるまでは待たないとダメよ。ふたりのためにも」

「なにがっ!?!」

「きちんと判断できる年齢にならないと、やっぱりゆかりがたぶらかした、みたいに思われちゃうし……」

「わけわかんないんだけどっ!?!」

母の中で、自分とヒカルの関係が一体どうなってるのか。

ゆかりがきちんと説明しても、母はわけ知り顔でうんうんうなずくだけだった。

11 女子高生、訪れる

「あなたが日宮ゆかりさん……ですか」

ゴールドデンウィークを直前に控えたある日。

下校の折、校門の前で、そう声をかけられて。

振り向くと、そこに居たのはよく見知った顔——ヒカルの幼なじみ、藤崎あかりだった。

——あかりがなぜ？ しかもなんか怒ってる？

戸惑いながらも、ゆかりは笑顔を作って答える。

「はい。お姉さんが日宮ゆかりですよ。キミは……ひよつとして、ヒカルくんの幼なじみで、おなじ囲碁部のあかりちゃん？」

一応、ゆかりとしては初対面ということになる。

距離感を測りかねながら尋ね返すと、あかりは先制パンチを食らったようによろめいた。

「は、はい！ あかりです！ ヒカルの幼なじみの！」

「うん。ヒカルくんから、あかりちゃんの話は時々聞いてるよ。キミも、ヒカルくんからわたしの話を聞いたのかな？」

「いえ……ヒカルはなにも言ってくれませんでした。今年高校生になったお姉ちゃんから、あなたの話を聞いて……」

そういえば、あかりには姉がいる。

彼女がゆかりとおなじ学校に入っていて、ゆかりの学校での評価は……ものすごく嫌な予感がして、ゆかりは冷や汗が流れるのを感じた。

「こ、これ以上ヒカルをたぶらかさないでください！」

場所は校門の前。下校する生徒も多い。

女子中学生から男子中学生を寝取った女の誕生である。

いまさらだが。

「……あかりちゃん、落ち着いて。わたしたち会話が必要だと思っ
ものすごい誤解があるから」

興奮するあかりを、ゆかりは必死でなだめる。

大声で注目を集めまくっていることに気づいたのか、あかりは顔を
真っ赤にして……それから、声を潜めて聞いてきた。

「……じゃあ、ヒカルと毎週デートしてるってのは嘘ですか？」

「喫茶店や公園でいっしょに碁を打って、その後ラーメン屋には行っ
てるかな」

「デートじゃないですか！　じゃあ、三谷くん聞いた、ヒカルを家に
連れ込んだっていう話も！」

「ネット碁をやらせてあげただけだよ……わたしの部屋で」

「事案じゃないですか！」

全力でツッコまれる。

周りでは、下校途中の生徒たちが何事かと視線を向けている。

あかりは再び周りの視線に気づいて顔を赤らめるが、それなら始め
から大声出さないほうがいいのでは。ゆかりはそう思ったが、まあ我
慢できないものがあるのだろう。

「えーと、とにかく、どこか落ち着ける場所に行こうか。このままだと
わたしの世間体は死ぬ」

なぜまだ生きていると思うのか。

この後喫茶店で説明して、無事情を理解してもらった。

あかりは別れ際に「こんなのぜったいおかしいですから！」と言い捨てて、帰っていった。

理解とはなんなのか。



「——ってことが、昨日あったんだよ」

恒例の、ヒカルとの対局の日。

喫茶店で対局を終えた後、あかりとの一件を話すと、ヒカルはうんざりしたような顔になる。

「あかりのやつナニやってんだ……囲碁部でも、ゆかり姉ちゃん関係でひと騒ぎあったんだ。みんなイロイロ聞いてきてうつとーしいつたらなかったぜ」

「部のみんなが？」

「ああ。あかりがゆかり姉ちゃんの名前を出して、三谷がオレたちがいっしょに打ってるって話をして、そしたらみんないろいろ聞いてくるし、夏目のやつがひたすら『藤崎さんが居るのにその上……こんなことは許されない』って繰り返して」

そこはわかっておいたほうがいいのだが、ヒカルが気にする様子はない。

「——にしても……ゆかり姉ちゃん、なんか急に強くなってねーか？」

打ち終えた盤面に視線をやりながら、ヒカルは眉根を寄せる。

「あ、わかる？ 今日わたし、碁盤が狭く感じたんだ。ひさしぶりの感覚だよ」

以前、"sai"と塔矢行洋の対局の後にもあった感覚だ。

もちろん、それでも佐為の領域には届かない。

とはいえ、今日の碁は上出来で、ひさびさに半目勝負に持ち込めた。塔矢行洋との対局のように、碁盤の最深まで潜ることは出来なかったが……佐為にも冷たい汗を流させるくらいは出来たんじやないかと自負している。

「……なんかキツカケとかあったの？」

「きつかけ？ ……やっぱり塔矢先生との対局の影響かなあ」

「え、ゆかり姉ちゃん塔矢先生と対局した——あーっ!? 騒ぐな佐為っ！」

言葉の途中でヒカルが悶絶する。

塔矢行洋に執着してる佐為なら、まあこうなるよな。とゆかりは苦笑した。

「負けた碁だけど……あとで並べてあげる」

「うん、でもどうやってゆかり姉ちゃん、塔矢先生と打てたんだ？」

「それがね。塔矢先生に就職先を紹介してもらう時に、まずは実力を知りたいって……そうだ！ おかげで囲碁サロンへの就職が内定したんだよ！ えへん！」

「え、就職？ 塔矢の碁会所に？」

「そう。これで将来の心配せず、心ゆくまでヒカルくんと打てるよ！」

「いえーい！」とゆかりが上げた手に、ヒカルは苦笑を浮かべながら、ハイタッチで応じる。

「……まったく、気楽だなあ、ゆかり姉ちゃんは……おめでと。つぎは

オレだ。まずは海王中との団体戦。それからプロ試験。キメて来るから、応援してくれよな！」

「もちろん！ わたしも力になれるなら、なんでも手伝うから、ヒカルくんもがんばってね！」

「ああ——佐為うるさい！ さすがに塔矢名人との対局はムリだつて！」

話の途中でヒカルは明後日の方向を向いて、虚空相手に戦い始める。

その様子を、ゆかりは菩薩の如き笑みでながめていた。

○

「手伝う、とは言ったけど……」

そんな話があつてから数日。平日の放課後。

ヒカルの頼みで葉瀬中を訪れることになったゆかりは、すこし緊張しながら校門をくぐった。

日宮ゆかりは葉瀬中の卒業生である。

なので母校を訪れることに、あんまり抵抗はない。

だが進学先について、先生の頭を悩みに悩ませた日宮ゆかりが、他人の進路について、先生に説明する日が来るとは思わなかった。

「日宮さん」

「あ、タマ子先生。ご無沙汰してます」

玄関口で、待ち合わせの相手と会えて、ゆかりはほっと息をついた。

進藤ヒカルが囲碁部の顧問としてお世話になっている先生であり、実はゆかりも、中学のころ副担任として見てもらった。

近況を報告しながら、向かった先は、生徒指導室。

そこでゆかりは、タマ子先生と向かい合って座る。

「今日は、進藤くんのこと、無理言って来てくれてありがとう」「いえいえ。わたしも、進藤くんがプロ棋士になるのを応援していますから、囲碁の世界のことを知りたいっていう先生のお気持ちはうれしいです」

軽く挨拶して……タマ子先生がため息を吐く。

「囲碁のプロを目指すっていう進藤くんことは応援したいんだけど、プロ試験のことも、囲碁の世界のことも、よくわからなくて……」「強い人なら中学生でプロ入りする世界ですからね。進藤くんの挑戦は決して早くはありません。普通は院生として腕を磨いて、プロを目指すんですが——」

「ちよ、ちよつとまってね日宮さん、メモするから」

軽く説明すると、タマ子先生はあわててメモを取りはじめる。

「ちなみにインセイってなにか聞いていいかしら?」

「簡単にいえばプロ候補生として教育を受けてる子供たち、ですかね」

「進藤くんはそのインセイじゃないのよね?」

「はい。実力的には見劣りしませんが……なのでヒカルくんの場合は外部受験生として、プロ試験に挑むことになります」

「外部受験生……はい」

メモを取りながら、タマコ先生が促す。

「プロ試験は予選を経て、約2ヶ月間の本戦を戦います。8月下旬に始まって、だいたい10月末までですね。平日の対局もありますので、その日は公欠することになります」

「うん……はい」

「本戦は受験生による総当たり戦です。上位3人が合格者として、プロへの道が開かれる……って感じですよ」

プロ試験について、試験合格後について、そもそもプロ棋士とはなんなのか、どんな仕事をするのか、収入はどれくらいでどんな生活になるのか。

ゆかりは進藤ヒカルの頃の記憶を引っ張り出しながら、一通り説明した。

ようやく一息ついて。

「ふう……ありがとうございます。進藤くんから聞いてたけど、本当にくわしいのね」

「プロの方が来られる碁会所でアルバイトしてますからね、いろいろと耳に入るんですよ……タマ子先生。進藤くんのこと、よろしくお願ひします」

「ええ、もちろんよ。これでご両親にもきちんと説明できそうだし……日宮さん。進藤くん、プロ試験に合格する見込みはありそう？」

「はい。実力的には、まず問題ないと思います」

「そう……進藤くん、夢を叶えてほしいわね」

「ええ。本当に……」

しみじみと、語り合う。そのあと軽く雑談してから。

ゆかりがいとま乞いして、生徒指導室の扉を開けた——その時。

「——わっ！」

と、幾人かの声。

廊下には、とても見覚えのある顔が並んでいた。

三谷、夏目、女子のあかり、津田、金子さん、1年生の小池。囲碁部のメンバーだ。

「えーと」

ゆかりが戸惑っていると、囲碁部一同は、ジロジロとゆかりの顔を見てから、たがいに目配せして。

「許されない。進藤有罪」

夏目の言葉に、他の部員が次々と声を上げた。

「……進藤有罪」

「み、みんな騙されちゃだめだよ。有罪はあっちなんだから……!」

「わ、わたしはあかりちゃんに同意で」

「これ有罪は進藤よね?」

「えーと、進藤先輩有罪で」

これはなんの裁判なのか。

首を傾げていると、背後からタマ子先生が顔をのぞかせる。

「なにやってるのあなたたち」

「な、なんでもないです! 失礼します!」

囲碁部員たちは蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

そのうしろ姿を、しばし見つめて。

「……いったいなんだったんでしょう?」

「さあ……とりあえず、みんなが居る前で、日宮さんに会いに来なかった進藤くんは、有罪ってことかしら?」

先生まで妙なことを言い出したので、ゆかりは首を傾げた。

12 女子高生、迫られる

満を持して挑んだ中学夏季囲碁大会。

葉瀬中は……みごと団体戦で海王中を破り、優勝を決めた。

その直後の、ヒカルとの対局の日。

筒井部長以来の悲願成就のお祝いに、ゆかりはふたりきりの祝勝会を提案した。

「祝！ 海王中打倒！ いえーい！」

「いえーい！」

ゆかりの掛け声に、ヒカルもテンション高く声を上げる。

場所はいつもの喫茶店……ではなく、好きに騒げるよう、駅前のカラオケボックス。

テーブルには、メニューからチョイスした様々な料理。

ソフトドリンクで乾杯しつつ、ゆかりは本日の主人公と語り合う。

「でもすごいね。ヒカルくんは当然としても、副将の三谷くんまで快勝だし、三将の夏目くんも、囲碁をはじめて一年も経ってないのに、海王中の三将にあと一步まで迫るなんて」

「夏目が伸びたのは、オレもびっくりしたよ。アイツ性格のせいかな碁も大人しくて物足りなかったんだけど、イロイロあってオレには攻撃的な碁を打つようになって、おかげで格段に上達したっつーか……まあ結果オーライだったな……」

なぜか遠い目で、ヒカルは語る。

その理由は、ゆかりには知りようがないが……深く聞いてはいけない気がした。

「女子は2回戦負けで残念だったけど、みんなよく頑張ったよ。とて

もじゃないけど、2年前には部員1人の零細囲碁部だったなんて思えない」

「ホントにな。筒井さんが居る内に勝てなかったのはくやしんだけど……やっぱ三谷のおかげだな！ アイツがイロイロ頑張ってくれたから、海王に勝てたんだ！」

話を聞いて、ゆかりはちよつと泣きそうになった。

塔矢アキラに追いつく。

そのために三谷に、囲碁部に背を向けて、ゆかりはただひたすらに前に進んだ。

そのことに後悔はない。

ただ、あのとときの自分あまりにも無知で、そのためいろんな人に苦い思いをさせてしまった。

だから。ゆかりにとって、今のヒカルはあまりにもまぶしい。

「でも、これで」

ゆかりはヒカルに顔を向ける。

悲願は達成した。

ならヒカルにも、囲碁部を離れる時が来たのだ。

「ああ。囲碁部は三谷たちに任せた。オレは塔矢を追ってプロになる」

ヒカルはそう言って、拳を手のひらに打ちつける。

「自信はどう？」

「バッチリさ。和谷にも伊角さんにも、ほかの連中にだって負ける気しねえ」

「油断は大敵だよ。ヒカルくんは強いけど、ほかにも強い人が受験してくるかもしれないからね」

「勝つき。長いこと塔矢のヤツを待たせてるんだ。こんなとこで足踏
みしてられねえからな」

闘志を燃やすヒカルに、ゆかりは声援を送る。

「その意気だよ！ ヒカルくん、がんばって！」

「ああ、がんばるぜ！」

ノリよくふたりでグーをぶつけ合って、それから。

ヒカルはゆかりの様子をうかがいながら、遠慮がちに口を開いた。

「……なあ、ゆかり姉ちゃん、オレ、プロ試験受かったら、お願いがあ
るんだけど、いいかな？」

「うん。いいよ。合格したら、なんでも叶えてあげる……どんなお願
いか聞いていい？」

ゆかりが尋ねると、ヒカルはいたずらっぽい笑みを浮かべて。

「それは……合格するまで秘密で！」



「……ってことがあったんですよ」

囲碁サロンでの仕事の合間。

ゆかりは先輩の市河さんに、葉瀬中の優勝とその後の出来事を、身
内自慢まじりに報告する。

すると、お願い云々の話をしたあたりで、市河さんが血相を変えた。

「ゆかりちゃん、思春期の男の子になに言っちゃってるの!？」

「え。わたし、そんなにおかしいこと言ってますよね？」

ピンとこなくて、ゆかりは首を傾げる。

その様子に、市河さんは深い溜め息をついて。

「あのね。思春期の男の子にスキを見せず。え、えつちなことさせてとか頼まれたらどうするつもりなの？」

発想が妄想の域だが、自分の想像で顔を赤らめているのは、どうなのか。

ともあれ、おなじ時期の自分をよく知ってるゆかりにとっては、風評被害も甚だしい。

「市河さん。ヒカルくんですよ？ そんなこと言うはずないじゃないですか」

「ヒカルくんも男の子なの！ 男なんか、みんな狼なんだから油断しちゃダメ！」

唐突に始まった女子の話に、囲碁サロンの常連たちは、ちよつと居心地悪そうにしているのは、さておき。

市河さんの注意に、ゆかりはやはり納得がいかない。

昔の自分の下心まで疑われている気になって、なおも言葉を返す。

「えー。じゃあみんなって言うなら、塔矢くんもですか？」

「なに言ってるのよ。アキラくんはそんなこと言わないわよ」

市河さんは真顔で言った。

秒で矛盾させてくる彼女だったが、ツツコめる者は誰も居なかった。

○

あつという間に夏休みになった。

進藤ヒカルにとつてはプロ試験に挑む、大事な時期だ。

ゆかりも高校3年生。

本来受験に向けた大切な時期なのだが。

すでに就職が決まったゆかりは、友人一同からのうらめし気な視線をもものともせず、夏と囲碁をエンジョイしている。

「お、ヒカルのやつ、順調に勝ってるな」

クーラーの効いた自室で、ゆかりは今日もヒカルの勝敗をチェックする。

日本棋院のホームページを調べれば、プロ試験の対局結果が掲示されるので、ゆかりは毎日これを確認していた。

ちなみに対局は週3日なので、毎日調べる意味はない。

ネット碁の合間に、ついでに、という言い訳で、一日に何度も見ているが、もちろんあたらしい情報が出てくるわけもない。

予選を危なげなく通過し、すでに本戦。

伊角や和谷、越智などのライバルも、初戦を良いスタートを切っている。

意外だったのが、受験者の名前に門脇の名が無かったこと。

学生タイトルを総なめにした実力者である彼は、偶然から日本棋院で当時院生だったヒカルと対局。

門脇のことを知らなかったヒカルは、佐為に打たせて……結果彼は、鍛えなおすためにプロ試験受験を一年先延ばしにした。

だから、ヒカルが院生になっていない今回は、彼が参戦してなくてはおかしい。

「……いや、ヒカルと対局した可能性もある」

ゆかりは気づいて、口の中でつぶやく。

院生でなくとも、ヒカルは二度、日本棋院を訪れている。プロ試験に必要な書類を貰いに行った時と、提出した時。

「そんな時なら……ヒカルが門脇さんとやりあう機会はある」

可能性としては、無くはない、程度か。

本当にそうだったとしたら、ひどい衝突事故もあったものだ。

まあ、どのみち受験していない人間のことを考えても仕方ない。そんなことより、いま気になるのは……

「もどかしいな。ヒカルの実力を直接測れたら、こんなに心配することはないのに」

言動を考えれば。

そしてヒカルが早くから本格的に囲碁を始めたことを考えれば。いまのヒカルは、おなじ時期のゆかりより、おそらく相当強い。

だが、実際どれくらい強いのか。

佐為としか打てないゆかりには、知りようがない。

「自分で言うのもナンだが、この頃のオレはまだガキンチョだ。カンタンに平常心を失っちまう。ちよつとした動揺でいつもの碁が打てなくなる。そんな風にハマったら……マズイぞ」

もつとも、ヒカルには佐為が居る。

動揺による敗北を、長々と引きずるような真似はさせないだろうが。

「……昔オレもやらかしてるからなあ。それだけが心配だ」

だが、ゆかりの心配は杞憂だった。

2日目以降もヒカルは順調に勝ち続け、対戦表には白星が並んでいく。

大島に勝ち、フクを退け、本田を制する。ゆかりが負けた相手にも、勝利を重ねていく。

「おいおい。まだ和谷や越智が残ってるとはいえ……伊角さんをはじめ、強敵を軒並み倒して無傷の20連勝？」

結果を確認して、ゆかりはつぶやく。

強いとは思っていた。

だが、ここまでとは。

「ヒカルくん……キミは、どこまで強くなってるの？」

思わず。

ここにはいないヒカルに呼びかけて。

ゆかりは、椅子に体重を預けて天を仰いだ。

白扇子をしっかりと握りしめて、こみ上げてくる得体の知れない感情を、なだめながら。

結局。

進藤ヒカルは全勝のままプロ試験を制した。

そして奇しくも同日。

日宮ゆかりは、ある奇妙な挑戦を受けることになる。

13 女子高生、見入る

その日。

バイトから帰ってきて、プロ試験の最終結果をチェックし、ヒカルの全勝を知った後。

習慣でログインしたワールド囲碁ネットで、ゆかりは奇妙なメッセージを受け取った。

チャットしてきたのは、“zelda”——和谷だ。

それ自体は変じゃない。高段位帯でずっと打っている“zelda”とは、ゆかりも何度か対戦経験がある。挑戦してきてもおかしくない。

だが、メッセージの内容は、想像したものと少し違った。

「アナタト ウチタイヤツガ……あなたと打ちたいヤツが居る。明後日16時に、“hikaru”の挑戦を受けてほしい……？」

ゆかりは軽く混乱した。

一瞬間が真っ白になって……それから、衝撃がやってきた。

「“hikaru”を和谷が紹介!! ふたりは知り合い——ってことはひよつとして“hikaru”はヒカルか!？」

去年の夏休みに対局した“hikaru”は、院生レベルの実力者だった。

それが実は進藤ヒカルだったと言われても、急には受け入れられない。

なにせ同時期のゆかりは、三谷にも敵わなかったのだ。

いくら本腰を入れたのが半年近く早いといっても、あまりにも差がありすぎる。

「……でも、勘違いじゃない。日曜のバイトを避けて対局日を指定してきたことといい、当時打ち回しから感じた“sai”っぽさといい……間違いない。ヒカルだ」

ひとつひとつ考えてみて、ゆかりは確信に至る。

だが、ヒカルの方は、自分の正体がバレてるなんて思いもしないだろう。

“hikaru”が進藤ヒカルだと確信できたのは、ゆかりが“zeida”は和谷だと知っていたからだ。

その事を知らないヒカルは、和谷を介して匿名の挑戦者として、ゆかりに挑もうとしてるのだろう。

なぜか。

決まっている。とゆかりは歯を見せて笑う。

目の前に強い碁打ちが居る。

その強さを、進藤ヒカルは佐為の横でずっと見てきた。

「試しなかったんだな……いまの自分が、オレ相手にどこまで通じるか」

ゆかりは、ずっと佐為の強さを追ってきた。

佐為と打ちながら、その強さに憧れ、追いかけてきた。上ばかり見ていた。

だから、いままで気づいていなかったのだ。進藤ヒカルが、後ろから追いかけて来ていたことを。

——まるで、オレが塔矢の立場じゃねーか。

そう考えると、断る理由はなかった。

こみ上げてくるのは、抑えていた得体の知れない感情。

ゾクゾクする感覚に、自然と口の端を吊り上げて。ゆかりは“zeida”に了承の旨を伝えた。

○

明後日、月曜日。

学校から帰宅後、ゆかりはコンビニの買い物袋を提げて部屋に直行する。

母には朝に、夕食がいらぬことを伝えている。対局に邪魔が入ることはない。

部屋に入ると、そのままパソコンデスクの前に座る。

それから、モニタのまえにコンビニで買ったペットボトルの水とチョコレートを並べる。長丁場の対局では、脳への栄養は必須だ。

準備を万端に終えると、白扇子を持って、時間を待つ。

ログインは、まだしない。早く入りすぎて、他の人間からの対局申込みの対処で集中を乱されたくない。

16時になるのを待ってから。

ゆかりはおもむろに、ワールド囲碁ネットを立ち上げた。

“h i k a r u”——ヒカルは、すぐに挑戦してきた。

持ち時間は各自3時間。いまから打てば、終わるのは夜遅くなるだろう。

——こんな時間まで打つのは、ネットカフェじゃ無理だな……和谷ん家で打ってるのか？

ゆかりは推測する。

それなら、この勝負に“z e i l d a”が絡んできたのも納得がいく。

先番はヒカル。

ゆかりは口角を挑戦的に持ち上げ、白扇子を手に宣言する。

「——さあ、好きに打ってこいよ、ヒカル。オマエのすべてを、見せて

みろ」

対局は、序盤は穏便に進行した。

盤面深くから情勢をにらみながら、ゆかりはヒカルの仕掛けを待つ。つ。

「状勢はオレが有利。つーかこのままじゃどんどん悪くなってくぞー
ーと、イヤなところに打ってきたなあ」

ゆかりはわずかに眉をひそめる。

一見手損だが、穏当な変化を許さない絶妙な位置だ。

とはいえ、別方向に変化させればいいだけの話。白もそれなりに損にはなるが、形勢はまだ動かない。

ヒカルはさらに戦場を移しながら、白陣に切り込んでいく。

石が絡まりあって互いを侵す。ヨミは的確で早く、ゆかりの模様を食い破る鋭さを持っている。

感嘆の言葉が、ゆかりの口から漏れた。

「……ツエエ。北斗杯の頃の社、いや、秀英スヨン並か？ プロの高段との対戦経験もねえくせに、よくここまで……ダメだダメだ」

ゆかりはあわてて頭を振る。

すっかり保護者目線で見えてしまっている。

小学生の頃から面倒を見てきたのだから、それも仕方ないが……碁打ちが勝負の場に持ち込むような感情じゃない。

「ヒカル。オマエは強いよ。おなじ頃のオレに、オマエくらいの力があればって思うくらいに……」

だが。

と、ゆかりはつぶやきながら、黒石にツケる。

ヒカルの手は、ここからの変化を考慮していない。ヨミ抜けがある。

そこから、ただの数手。

五分に傾き始めていた盤面は、一気に白優勢に引き戻された。

「——オレもあの頃のオレじゃねえ。佐為に学んだ、佐為と打ち続けた。塔矢先生からも吸収したオレの力、オマエに見せてやる」

ゆかりの打った手に、劣勢を強いられたヒカルは長考する。

その間にゆかりは水を飲み、チョコをひと欠け舐めて、脳に栄養を送りながら——盤面深くに沈み込む。

——掴むのは、ヒカルの応手と、ここからの変化。

そろそろ大寄せだ。

すでに大きく挽回する手は限られている。

ゆかりの勝利は動かしがたい情勢——いや。と、盤面の底から、ゆかりは否定する。

「二筋……いや一筋か。細く長いが、ヒカルの逆転の目はある」

だが、それを見つげられるか。

見つけられても、応手を間違わずに済むか。

未熟なヒカルでは、最初の一手ですら高すぎるハードルだ。

「先手をこつちに寄越したら終わり。ヨセを間違えても終わり。そこまで完璧に進めて、ようやく半目差の黒勝ちだ」

ここまで見えているのは、おそらくゆかりと佐為だけだろう。

いや。佐為とて、自分が対局していなければ、そこまでの深みに到れるか。

「さあ、どう打つ？」

ゆかりは白扇子を挑戦的に揺らしながら、ヒカルを待つ。
そして。

勝利につながる唯一の場所に打たれた黒石に。

ゆかりは——佐為の姿を幻視した。

心臓が、跳ね上がる。

息が荒くなる。痺れる思考で、ゆかりは無意識にモニターに映る黒石に手を伸ばす。

「佐為？ ……違う。佐為じゃない。オレとヒカルの勝負に割って入るような佐為じゃねえ」

白扇子ごと、高鳴る胸を両手で押さえながら、ゆかりはつぶやく。

「だが、いまのヒカルに打てる手でもねえ……佐為だ。ヒカルの中で育った佐為の碁が、アイツにこの一手を打たせたんだ……そうだろう、佐為？」

自分の中の佐為に語りかけながら。

ゆかりは喜悦に震える指で、ヒカルの手に応じる。

静寂の中、パソコンから石を打つ音が鳴りつつける。

そして。か細く、長い道を、ヒカルはなんとか渡りきって形にした。
だが、代償としてヒカルの持ち時間は、ほとんどなくなってしまう。
た。

「——焦るな。あとは一本道だ。たとえ持ち時間がなくても、ここまで打てたオマエなら、やれるはずだ」

励ましながら、ゆかりの応手に容赦はない。

失着があれば、即座に咎める。その準備はできている。だが、ヒカルは間違えない。

限られた時間で、一本道を最後まで渡りきって……ついに半目の勝利を勝ち取った。

「ああ、ダメだなオレは……負けてクヤしいはずなのに……ヒカルが勝ったことを、喜んじまってる。最後のほうヒカルを応援しちまってた」

両手を肘掛けから落としながら、ゆかりは言葉を吐き出す。

悔しさと同時に、しびれるような充足感が、ゆかりを支配している。

「でも仕方ねえよ。あんなクソガキだったあいつが、こんな碁を打つてみせたんだから……」

思い出す。出会った頃のヒカルを。

海王中打倒に燃えていたころのヒカルを。

塔矢アキラに追いつこうと、必死に頑張ってきたヒカルを。

いつだって碁に真剣だった、進藤ヒカルと過ごしてきた日々を。

「——なんだ」

振り返って、ゆかりは気づいた。

「オレはもうとつくに……ヒカルのやつに入れ込んじゃまってたんじやねーか」

佐為と打ちたいと願っていた。

ヒカルに優しくしたのは、そのためのはずだった。

なのに、いつのまにか。ヒカルの成長を楽しみに感じている自分がいた。

ヒカルがどこまで行くのか、このまま見守っていきたいと思う自分がいた。

左手で顔を隠しながら、ゆかりは天を仰いで告げた。

「負けました……すごかったよ、ヒカル」

14 女子高生、渡す

ヒカルとの対局から、数日。いつもの待ち合わせの日。公園の石のテーブルの前で、ゆかりはなんとも複雑な表情でヒカルを待っていた。

「……ヤバ。ヒカルにどんな顔して会ったらいかワカンねえ」

ソワソワしながら、ゆかりはつぶやく。

これまで無条件に可愛がってあればよかったわんこが、急に人間に化ければ、接し方も行方不明になるだろう。

ゆかりにとって、いまのヒカルはそんな感じだ。

「ゆかり姉ちゃん！」

悩んでいると、当のヒカルがやってきてしまった。

小走りで駆けてくるヒカルに、微妙に引きつった笑みを向けて、ゆかりはとりあえず棚上げすることにした。

「ヒカルくん、プロ試験全勝突破おめでとう！」

いつもの通りに出来ているだろうか。

不安になりながらも祝福すると、ヒカルは思いの外落ち着いた笑みを返してきた。

「ありがと、ゆかり姉ちゃん」

——いや、落ち着いたというか……疲れているような？

内心首を傾げるが、ちょうどよかったかもしれない。

ヒカルを心配していると、ゆかりにいつもの調子が戻ってきた。

「どうしたの？ 調子悪いの？ ちょっと横になる？ 膝枕してあげようか？」

おまわりさんこいつです。

「あー、大丈夫……軽い寝不足。ちよつと、実力の倍くらい出せた会心の碁を打ったせいでスランプになって、カンを取り戻すために打ちまくったから」

ヒカルがあくびを噛み殺しながら答える。

会心の碁、というのは、ゆかりとのネット碁での対局のことだろう。しかし会心の碁がきっかけでスランプになるなんて、どこかで聞いたような話だ。

ゆかりは思わず苦笑する。

「そう……わたしも最近、ネットでいい対局が出来たんだ。負けた碁だけど……調子悪いならそれを並べて検討する？」

「あー……いや、打とう。わかってるって佐為」

後半は小声だったが、ゆかりはしっかりと聞いている。

たぶん佐為に急かされたのだろう。「ヒカルばかりズルい！」とか言っただけ。

想像して、ゆかりは思わず口角を上げる。

「じゃあ、始めようか。今日のわたしは、ちよつと本気だよ」

気合を入れて、宣言する。

いまのヒカルの前で、ヌルい手は打てない。

——さあ、打つぞ、佐為。

心のなかでそう伝えて、ゆかりは第一手を打った。



「やっぱり強えなゆかり姉ちゃん。ここの展開は読み切り？」

「うん。ヒカルくんの狙いは読めてたから、その先で使えそうな部分探ってる」

「ああ、ならヒイておけば……ああ、やや損になるな。ここは咎めようがない感じか」

対局が終わって。

石テーブルを挟んで、ゆかりとヒカルは検討を始める。

注意して聞いていると、実はヒカルの意見っぽいものも混じっていることに気づかされる。

——そりやそうか。いまのコイツは、オレと佐為の対局の一番真ん中に居て、両方の考えが見えるんだ。

強くなるはずだ、と、あらためて納得する。

単純な実力なら、まだまだゆかりのほうが上だが……

「一人前に……いや、ヒカルくんもプロになるんだね」

「あらためて言われると、合格したんだなって実感が出てきたぜ」

思わず出そうになった失言を誤魔化すと、ヒカルはそう言って拳を握った。

「——いよいよプロだ。塔矢との勝負も、そう遠くねえ……楽しみだ

ぜ」

ヒカルは不敵な笑みを浮かべる。

目標だった塔矢アキラと、ついにおなじ舞台に立てるのだ。闘志を燃やすのも仕方ない。

だが、自分をないがしろにされているようで、ゆかりはちよつとムツと来た。

「でもプロになるのは4月からだね？ 新初段戦があるとはいえ、時間が出るのはたしかで。これからいっしょに打つ時間増やせるね。週2……いや、週3くらいは……」

言いながらゆかりが身を乗り出すと、ヒカルはちよつと困った顔になる。

「オレもそれはうれしいんだけど……囲碁部の連中も放つとけねえ。オレが大会に出れないんだから、その分鍛えてやらねえと」

激しく文句を言いたかったが、ゆかりは引き下がった。

囲碁部に押しかけては追い出されていた自分のことを思い出して、言える立場じゃないと気づいたのだ。

と、唐突に。

ヒカルはなにか思い出したように手を打った。

「そうだ、ゆかり姉ちゃん忘れてないよな？ プロ試験に合格したら、お願い聞いてくれるって話！」

その約束は覚えている。

というか、市河さんが余計なこと言うから、ゆかりはちよつとだけもやもやしてた。

「うん、約束してたよね。なんでも言ってみて？」

変なこと言わないとは信じてるが、ちよつとだけドキドキしながら、ヒカルに促すと。

「じゃあ、ゆかり姉ちゃんのその扇子、貰っていい？」

「扇子を？」

ドキリとした。

ゆかりにとって、この扇子は、佐為から受けとったバトンだ。

少なくとも、ゆかりは勝手にそう思っ、対局の場には白扇子を身に着けている。

そんな事知る由もないヒカルは、思いを語りだす。

「オレの勝手なことわりだけど……ゆかり姉ちゃんといっしょに勝負の場に立ちたいなって」

——オマエ……なんていい子なんだ。ホントにオレかよ。

話を聞いて感動しながら、ゆかりは少し迷う。

佐為からのバトンであるこの扇子は、おいそれと他人に渡していいものではない。

これが以前のヒカルだったら、「十年早い」と突っ返したところだが……

たとえ出来過ぎでも、実力以上の碁だったとしても、対局で負かされたなら、無下には出来ない。

「半分……かな」

そう言っ、ゆかりは白無地の扇子を差し出す。

「ありがとう、ゆかり姉ちゃん……半分？」

「そう、半分。この扇子は大事なものだから、全部は渡せない。だから、あげるのは半分だけ。その扇子はわたしとヒカルくん、ふたりの物だから……大切にしてね？」

ヒカルが、白扇子を手取る。

いずれヒカルも、佐為からこの扇子を預けられるだろう。

そうになったら、かわりにヒカルの扇子の半分の、貰ってもいいかもしれない。

そんな事を思いながら、扇子から手を離れた。

「ありがとう、ゆかり姉ちゃん！ゼツタイ大事にする！」

扇子を受け取り、はしやぐヒカルに、ゆかりは口の端を吊り上げる。

「うん。大事にしてね。その扇子を持つてる時は、わたしに見られると思うって……気を引き締めてね？」

「ゆ、ゆかり姉ちゃん……なんか怖くねえ？」

おっと、とゆかりは自重する。

いつもなら扇子で口元を隠していたところだが、その扇子はすでにヒカルの手の中だ。

——扇子を受け取った以上、半端な碁は許さねえからな。場合によつては、取り返しに行つてやるから、覚悟しろよな、ヒカル。

笑顔で繕いながら、ゆかりは心の中で、そう宣言した。

○

それから佐為と打って、打って。

一度、再戦を仕掛けてきた“hikaru”を撃退して、季節が巡る。

塔矢行洋との新初段戦は、ヒカルの中押し勝ちで終わった。

棋譜を見れば、佐為の碁なのは間違いないが、だいぶユルメて打っているのが見て取れる。

——おそらく5目半。それくらいで勝つと決めて打った碁だ。逆コミで有利な分、手もユルめる必要がある。

甘い、たしかに佐為の碁。

それを自分の碁として良しとできる。

いまのヒカルには、それほど実力があるということだろう。

もつとも、佐為にとっては自分が圧倒的に有利な、不本意な勝負だっただろうが。

それから、卒業の季節が訪れた。

先生方の温情もあって、かろうじて留年を回避できたゆかりは、友人たちといっしょに、無事卒業式を迎えることが出来た。

「卒業まで事案起こさずエライ！」と褒めてくる。そんな素敵な友人たちとも今日でお別れかと思うと、晴れ晴れするような、寂しくなるような、複雑な感傷を覚える。

「明日からは高校生じゃなくなるのかー」

つぶやくと、「社会人になってもアウトなものはアウトだからね!」と念を押される。

この誤解は、はたしていつになったら解けるのか。ゆかりは苦笑いを浮かべるしかない。

卒業式が終わると、皆それぞれの集まりで話している。

部活動の後輩に見送られたり、別れの日に感極まった親友同士が抱き合ったり。

中には後輩や、一緒に卒業する同級生に告白したりされたりしている姿も、見かけたりする。

学内の活動そっちのけで、アルバイトやら囲碁に勤しんでいたゆかりにとっては、別世界の出来事だ。

「……さて、帰りますか」

ひとしきり話してから。友人たちに声をかける。

「ゆかりはタンパクだね」と苦笑されながら、後日みんなで集まる約束をして。みんなでいっしょに校門に向う。

ちようど同じタイミングで、他の卒業生や、下級生らしい生徒たちも、5、6人ほどが、ばらばらと校門に向かい始める。

全員男子で、微妙に視線をさまよわせながらだったので、友人たちはピンときて、それぞれソワソワしていたが、ゆかりは気づかない。

「あの――」

誰かが、声を上げた、ちようどその時。

校門から、葉瀬中の制服を着た、幼さの残る顔立ちの少年が、ひよこりと顔を出した。

「あ、ヒカルくん――」

顔を輝かせて、ゆかりが校門に駆けていく。

その様子を見て、ゆかりの友人たちは「やれやれ」と頭を振り。

友人たちの後ろから近づいていた男子生徒たちは、泣きそうな顔になっっていた。

ゆかりはそんなこと眼中にない。

飛び切りの笑顔をヒカルに向ける。

「卒業式だから、来てくれたの？」

「ああ。真つ先におめでとうつて言いたかったから……卒業おめでと
う、ゆかり姉ちゃん」

「ありがとう！ ヒカルくんが来てくれて、すつごくうれしいよ！」

「いやつだなお前、と、感激で抱きしめたくなくなったが、ゆかりはさ
すがに自重した。」

卒業した学校での風評被害を気にする必要はないが、まあ、公衆の
面前では無理だと思ったのだ。

ゆかりが友人たちの方を向き直ると、みんなあきらめ顔で「行け行
け」と促す。

みんなに手を振ってから、ゆかりは学校を後にする。

「じゃあ、行こうかヒカルくん。どこへ行く？」

「せっかくだから、ちゃんとした石で打ちたいな。ウチかゆかり姉
ちゃん家で」

「じゃあウチで打とうか……今日はほんとにありがとう。来年のヒカ
ルくんの卒業式には、わたしも葉瀬中にお祝いに行くからね！」

「いやー、それはいいかなあ……」

そして日宮ゆかりは、校内の伝説になった。

15 (終) 元女子高生、打ち続ける

4月。葉桜の頃。

2年越しの進藤ヒカルと塔矢アキラの対決が、ついに決まった。その報せを、ゆかりは囲碁サロンで受けた。

市河さんが塔矢アキラから聞いた話で、と披露したのだ。

常連の中にも、小学生の頃の塔矢とヒカルとの戦いを見ていたメンバーがそれなりに居る。

そんな彼らは、この因縁の対決に興味津々だ。

「若先生が勝つかな」

「そりゃあ勝つだろう。進藤新初段との対戦は、いまのところ2勝1敗で若先生が勝ってる。プロになったのも、若先生が1年先だ」

「最初の対局は若先生の負けでは？」

「いくら若先生が負けたとおっしゃろうが、コミ有りでは勝ってたんだ。勝ちも勝ちでいいだろう」

「だがまあ、あんな碁石の置き方も知らないような子供が若先生のライバルになるとはねえ……」

「碁石の置き方も知らないとは言いますが、あの子は最初から強かったじゃないですか。イマドキの子だ。きつとネットで碁を覚えたんでしょう」

「ライバル？ とんでもねえ。若先生のライバルは、もう高段者やトッププロだ。初段の若輩じゃ敵わんだろう」

——うちのヒカル舐めるなよ。佐為とオレが手塩にかけて育てたんだ。塔矢にも勝つ！

常連たちの雑談に、ゆかりは心の中で宣言した。もはや親目線である。

——まあ、この対局は成立するか怪しいんだけどな。

ふたりの対決について騒いでいる常連たちの姿を見ながら、少々惜しい気持ちになる。

ゆかりの時、この対局は塔矢行洋が心不全で倒れ、塔矢アキラが欠席したことで成立しなかったのだ。

——顔を見る度に「健康に気をつけてください」とは言ってるけど……塔矢先生って無理しちゃうタイプの人だよなあ。

塔矢行洋は、多忙な中でも、ときおり囲碁サロンに顔を出す。

折につけてお願いしているのだが、逆に「機会があれば」と家での対局に誘われたりする。本人が多忙すぎて実現していないけど。

おそらく塔矢行洋は今回も倒れ、対局は流れるのだろう。

だが、対決が二度とないわけじゃない。

これから何度も、ヒカルと塔矢は戦うのだ。

だからゆかりはどちらかというところ、塔矢行洋の健康を心配していたのだが。

ほどなくして、塔矢行洋は対局中に倒れた。

その日は常連からの問い合わせの対応で、店はてんやわんや。

店どころか囲碁界全体が大騒ぎになっていたのだが、この時はまだ知る由もない。

ともあれ、ゆかりがとてつもなくお世話になってる人間だ。

市河さんと入れ代わりで見舞いに行くと、塔矢行洋はベッドから半身を起こし、外の景色を眺めていた。

「塔矢先生。日宮です」

「日宮くんか。よく来てくれた。まあ座りなさい」

「はい。失礼します」

勧められて、ベッド横の椅子に座る。

慣れたつもりだが、一対一だとやはり緊張する。
そんなゆかりの様子を見て、塔矢行洋は苦笑を浮かべた。

「ハハ。君が元気そうでよかった。囲碁サロンでの仕事は慣れたかね」

「はい。務める時間は長くなりましたが、さすがに慣れた仕事なので……塔矢先生こそ、お元気そうでよかったです」

「調子もいい、私としてはすぐにも帰りたいのだが、医者に止められてね。しばらくは、入院することになりそうだ」

塔矢行洋はそう言って、穏やかに。口の端を笑みの形に崩した。

「しかし、日宮くんには面目ない。あれほど身体に気をつけろと言われていたのに」

「いえ、先生のお立場が、なかなかそれを許さなかったのは知っているつもりです……この機会に、ゆっくりお休みになってください」

「ハハ。医者にも同じことを言われたよ。なかなかそうもいかないだろうが、気をつけよう」

それから。

しばらく雑談に興じた後、ゆかりはその場を辞した。
帰り際、ふと思いついたように、塔矢行洋は言った。

「そういえば少し前に、進藤くんが見舞いに来てくれたよ」

別に詮索された訳ではない。

だがゆかりは、動揺を抑えられなかった。

ゆかりとヒカルの関係は、市河さんから伝わっているだろう。

そして以前のヒカルは、塔矢行洋の見舞いに行った時、“s a i”との対局の約束を取り付けている。

——『たとえば同じカードの表と裏。そんな碁打ちが居ます』

以前ゆかりは、塔矢行洋に、ヒカルの秘密の一端を明かしている。ヒカルとゆかり、二人の言葉をつなぎ合わせると、カードの表と裏が、ヒカルと“s a i”だと気づくのは難しくない。

——塔矢先生のことだから、言いふらしたりはしないと思うけど。

帰り道、ゆかりは思う。

ひよつとしたら塔矢行洋が、佐為のことを知る日が来るかもしれないと。

あるいはそれは、佐為にとっては幸せなこと、なのかもしれない。負けないが。負けないが。



“s a i”と塔矢行洋の対局の時期が近づいている。

当人たち以外、誰も知るはずがないそのことを、日宮ゆかりは知っている。

“s a i”の正体を知るゆかりにも、ヒカルは対局のことを話していない。

妙に緊張したヒカルの様子や、対局の時の、佐為の一手の容赦なさを考えると、塔矢行洋と対局の約束をしたのは間違いないだろうが。

「ちよつと寂しいな……まあ、理由は何となく分かるけどな」

進藤ヒカルは、すでに新初段戦で塔矢行洋と対局している。

わざわざ“s a i”として塔矢行洋に対局を挑む、その理由をゆかりに説明できないのだ。

新初段戦で逆コミで勝てたから、つぎは互先で？

無くはない話だが、病み上がりの塔矢行洋に挑むのは、らしくないと、ゆかりなら感じる。

「結局、理由を説明できねえから隠してるのかねえ」

ゆかりはひとまず、そう結論づけた。

どのみちいっしょの席で対局を見る事はできないだろう。

だからゆかりも知らないフリをして、待つ。

自室のパソコンの前で、塔矢行洋と佐為の対局を。

おそらくは碁の神をすら満足させた、究極の一局の開幕を。

そして、ゆかりの記憶通りの時間に、ふたりの対局は始まった。

その日、世界は見た。

神の一手にもつとも近いふたりの棋士の対局を。

万人をうならせ続けた攻防は、終局を待たずして塔矢行洋の投了に終わった。

終局までを読めば、“s a i”の2目半勝ち。

ゆかりの記憶にない、鮮やかな棋譜だった。

○

本来半目の間で揺れる、拮抗した実力を持つ二人。

その勝負が、なぜゆかりの時と違ってしまったのか。

理由は明白だ。

——オレが佐為と打ち続けたからだ。

ゆかりの時の佐為は、進藤ヒカルが院生になって以降、ヒカル以外とほとんど対局していない。

だが、いまの佐為は、高い棋力を持つゆかりと対局を続け、“s a i”としても、以前より多くの対局を重ねている。その上積みだが、2

目の差となつて現れたのだろう。
モニタを前に、ゆかりは思う。

この一戦で、佐為はさらなる高みに至れたのだろうか。
これをきつかけに、佐為は以前と同じように、消えてしまうの
うか。

——わからねえ。

考えても、答えは出ない。

今回の対局は、名局には違いないが、以前とは違う。

だが佐為がなぜ消えてしまったのか、理由がわからない以上、消えないとも言えない。

佐為本人が「自分が消える」と言いはじめた時期を思い出せば、きつかけとなつたのは、塔矢行洋との対局で、間違いないだろうが。

——いや、迷うな。どのみちオレのやるべきことは変わらない。

佐為と打つ。

一度でも多く。

佐為が消える、その日まで。

それが進藤ヒカルが、日宮ゆかりとしてこの時に舞い戻ってきた理由で、存在意義だ。

いまはもう少し、いろんな理由が増えてしまったけれど……それだけは、絶対に変わらない。

だからゆかりは佐為と打ち続けた。

塔矢行洋が現役引退を発表して、大騒ぎになったときも。

観光ホテルでのイベントの仕事で、夜に緒方十段に絡まれたというヒカルの愚痴を聞きながらも。

「『sai』はキミか」と、緒方十段に詰め寄られて、なぜかヒカルがブチ切れた時も。

若獅子戦で対決したヒカルと塔矢が、会場で見っていた皆を唸らせる

熱戦を演じた時も。

葉瀬中囲碁部が、団体戦で男子は優勝、女子は準優勝したとヒカルが我が事のように自慢していた時も。

ヒカルが、あらゆる手合で無敗のまま、連勝街道を爆進中だと得意気に語った時も。

ネット碁の最中、性懲りもなく挑戦してきた“h i k a r u”を撃退した、そのつぎの日も。

塔矢行洋に「いっしょに中国に行つて、あちらで打つてみないか？」と誘われた時も。

なんだか知らないけど塔矢アキラに、むちゃくちや複雑そうな視線を送られたその日も。

知り合いの伊角さんや本田さん、門脇さんがプロ試験を通過したと、ヒカルから話を聞いた時も。

……あれ？

以前佐為が消えた時期をはるかに過ぎても、ゆかりは、まだ佐為と打っていた。

勘違いじゃない。ヒカルの背後には、たしかに佐為の気配を感じる。佐為は、存在し続けている。

「こっちはとつくに覚悟してるってのに……ありがたいけどな」

いつもの日、いつもより少し遅い時間。恒例の対局の帰り道。星空をながめながら、ゆかりは心のなかで佐為に語りかける。

「どうしたの、ゆかり姉ちゃん？」

「ううん。なんでもないよ、ヒカル」

「送るよ」と言つてついてきたヒカルに、笑顔を返して。

それから、ゆかりはまた天を仰いで。満天の星に手を伸ばす。

「……そうだな。ヒカルが居て、佐為が居て……前の佐為から想いを託された、オレが居る。なら、人の世の碁は、オレのときよりはるかに、神の一手に近づくはずだ」

案外、そんな理由なのかもしれない。

藤原佐為が、いまだ現世に残ることを許されているのは。

手を伸ばしたまま、ゆかりは星を見る。

夜空に散りばめられた星は、まるで神様が並べた碁石のようで。

広く、限らない星の並びに、圧倒されながらも、心が躍りだす。

「囲碁の神様。もし聞こえてるのなら、お願いだ。このまま佐為を現世に居させて……かわりに、生み出すから。神様をうならせるような名局を、いくらでも」

佐為と、そしてヒカルと——ずっと。

検討01 和谷義高の場合

——コイツ、強え……！

和谷義高が進藤ヒカルと打った感想はそれだった。最初はたいしたことないと思ってた。

打ち始めの時あきらかにぎこちなかったし、簡単にこちらの体制固めを許した。

だがエンジンのかかった中盤からは別人だ。

読んでない手から押してこられて、正直やられたと思った。

ヨセで取り返せてなかったら、勝敗を左右した半目は残せていなかっただろう。

あの少女——日宮ゆかりが自信を持って「院生なんか蹴散らせる」と言うだけのことはある。

だが。

「これだけ強えなら、序盤の体たらくはなんだったんだよ!？」

「だ、だって、まわりこんな大人ばかりで、見られながら打つのも自分じゃ初めてだし……」

「ハア？ オマエこんだけ打てるのにナニ言ってるんだ？」

和谷は呆れたような顔で言う。

たしかに、碁会所の受付で棋力を聞かれた時、院生だと答えたせいで、大勢の観客を背負った対局になった。

とはいえ、これほど打てる碁打ちが、おっさんに見られて緊張するというのは……アンバランスにもほどがある。

「オイ、オマエそれもったいねーぞ。せっかく席料払ってんだし、この辺のおっちゃんたちと打って場慣れしとけよ——なあ、こんだけ打てるヤツなら、みんな打ってみたいよな？」

和谷があたりを見回して声をかけると、観客から手が挙がる。

「そうだな。3子置きくらいで、ぜひお相手願いたいな」

「俺も打ちたいね。席亭！俺なら何子置きだい？」

「うーん、三沢さんなら4子置きだね」

「どうせならなるべく強面のおっちゃんがいいんだ！こいつのビビリを治したいから！」

「び、びびってなんかないやい！」

和谷の言葉に、ヒカルが反論する。

強面、と言われて、全員の視線が一人に向けられた。

髭面、オールバック、サングラスの巨漢で、たしかにいかつい。

「うん。ここは蝶野さんの出番かな」

「おっしや。ビビらせりやいいんだな？」

「わ、和谷あー!?!」

ずい、と顔を近づけられて、ヒカルが悲鳴を上げる。

なんだか目的が変わっている気がするが、ともかく。

こんな感じで、和谷はヒカルの面倒を見始めたのだった。

ちなみに、対局は相手に6子置かせてヒカルが勝った。



「――進藤って何者？」

プロ試験も佳境に入った頃。

和谷が院生の仲間とだべっていた時、ふと、そんな話題になった。

和谷の紹介で、すでに伊角をはじめ、何人かは進藤ヒカルと対局し

ている。その棋力の高さは、すでに院生内でも話題になりはじめていた。

「あれだけ強くて囲碁歴1年足らずだろ？ しかも師匠もいないってどういうことだ？」

「いや、師匠つつーか、面倒見てるヤツは居んだよ……プロじゃねーけど」

和谷は説明する。

日宮ゆかりのことだが、和谷の主観だと、ゆかりのほうがヒカルより遥かに格上なので、そう認識している。

「アママで？ 言っちゃなんだが、進藤の腕じゃもう師匠超えてないか？」

「それが、師匠の方も馬鹿強えーんだ。たぶん低段のプロじゃ相手にならねえくらい」

予想もしない言葉だったのだろう。

和谷の説明に、みな驚きを隠せない。

「元院生とか、年齢制限に引っかけたってプロに成れなかったクチか？」

「いや、高校生。女の。素性はマジで謎。進藤もよくわかってねえっほい」

和谷が答えると、院生仲間の本田がガタツと身を乗り出してきた。

「え、じゃあ進藤って女子高生のお姉さんに碁を教えてもらってるってこと？」

「お姉さんって……本田さんも高校生じゃん」

「いやその……スマン」

一同の冷たい視線に、本田は縮こまる。

本田も別に下心から反応したわけではないだろうが、言い方が悪かった。

「でも正直、進藤の強さが師匠のおかげってのなら、ちよつと興味あるかな」

「ムリだと思っぜ。アイツ、オレが師匠のこと聞くの嫌がるし」

「え、それってどういうこと？ くわしく！」

同じく院生仲間の少女、奈瀬が身を乗り出してくる。

奈瀬のほうが興味津々じゃん。と和谷は思ったが、和谷も他のみんなも突っ込まなかった。

「いや、奈瀬が思ってるような恋愛の話じゃねーと思っぜ。よくわかんねーけど——オレらとのつき合いと、師匠とのつき合いは別にしたい、みたいに思ってるのはすっげーわかる。アイツすぐ顔に出るし」
「ほほう。恋愛じゃなくても独占欲ではあると」

奈瀬は恋愛方向への想像をあきらめない。

「勘ぐりすぎだろ。アイツ絶対そこまで考えてねーぞ」

「そうやって興味ないフリしてたら、進藤に先越されるわよ」

したり顔で唱える奈瀬に、和谷はお前が言うな的な視線を返した。
奈瀬も、他人の恋愛事情には興味津々でも、自分で恋愛する気はさらさらない。

「というか囲碁づくしの毎日で、自分の恋愛なんて考えられないと、いつもぼやいている。」

「オレはそーいうのいいよ。んなことよりプロ試験に受かりてえ」
「それはそう」

和谷の言葉に、全員異口同音に返した。もちろん奈瀬も。

○

場所は日本棋院。

森下九段の研究会の前に、和谷と先輩棋士の冴木は、自販機の前で駄弁っていた。

話題は、日宮ゆかりについて。

いや、正確には、冴木が負けたワールド囲碁ネットの“yukari”についてだ。

「——“yukari”がアマの高校生？ 本当か？」

「ああ。自称だったけど……あの強さはホンモノだと思う」

「直接会って対局したのか？」

「そう。偶然喫茶店で。院生バカにされたと勘違いして、行きがかりで……そしたらノされた」

和谷が、がくりと頭を下げる。

頭に血が昇っていたとはいえ、いいところなしの対局だった。

「仕方ないさ。ネット碁での対局とはいえ、オレが打った感触は、高段者かリーグ戦棋士のそれだ。だから日本か、中韓か……いずれにせよプロに違いないと踏んでたんだがな」

「そこまで……いや、それくらい強えかもしれない」

師匠である森下九段との対局の手応えを思い出しながら、和谷はつぶやく。

日宮ゆかりの棋力は、和谷の目でははるか高みとしかわからないが、言われてみれば師匠に近いものを感じる。まったく、自滅したの

がつくづく惜しい。

「だけでもつたいないな。そいつプロ試験は受ける気ないのか」
「たぶん……弟子つつーか、面倒見てるヤツが居て、そっちに熱中して
る感じ?」

「弟子か。高校生でなあ……あれほどの腕でプロを目指さないことと
いい、いろいろ複雑な事情ありそうだな」

あふれる才能を持ちながら、プロ棋士になる事を断念する者は少
くない。

家族の無理解であったり、お家の事情であったり、あるいは金銭的
な事情であったり……理由は様々だが、それもまた、現実だ。

案外、その辺の事情もあって、進藤は日宮ゆかりについて語るのを
嫌がっているのかもしれない。

「奈瀬は色恋沙汰に結びつけてたけど、そういう感じじゃねーしな」

院生仲間との話を思い出しながら、和谷は冴木の言葉に同意した。

「色恋なあ……ちよつと待て和谷、色恋?」

うんうんとうなずきかけて、冴木は動きを止めた。

「ああ、冴木さんも勘ぐり過ぎだっと思うだろ?」

「違う。ちよつと待て。確認したいんだが、"yukari"と弟子
の性別を教えてください」

「あー、"yukari"は女。日宮ゆかりって名前。面倒見てる進
藤は男だよ。たしか1コ下で中1だったかな」

「本当か……あれほどの腕で……」

冴木はなにやら衝撃を受けている。

まあ高校生の女がああ強さだ。和谷も気持ちにはわかる。しばらく絶句していた冴木だが、ふと気づいたように口を開いた。

「……なあ、それ大丈夫な話なんだよなあ？」

女子高生と中学なりたての一年生の恋愛関係。

冴木が心配するのももつともだが、和谷からすれば要らぬ心配だ。

「たぶん。そうなら進藤がそんなに懐かねえと思うし。実際ソイツ進藤にはむちゃくちゃ甘かったし」

「いや、甘いから危険なんだが……」

和谷は弁護したかったが、事実を言えば言うほど疑惑を深めてしまおう気がして、あきらめた。

和谷義高は思う。

進藤ヒカルと日宮ゆかりの関係は謎だけど、まあ、悪い関係じゃないだろうと。

あと進藤絡みは深く考えるとワケ解んなくなってくるから、考えるだけ無駄だと。

検討02 葉瀬中囲碁部の場合

「こんなことは許されちゃいけない」

夏目洋介は激怒した。

かならず世の理不尽を正さねばならぬと決意した。

夏目は男女の恋愛を知らない。夏目は彼女いない歴〓年齢である。アイドルを追いかけ、クラスの気になる子をちらちら見ながら過ごしてきた。

それゆえ彼女持ちへの敵愾心だけは人一倍であった。

などと、走れメロスの冒頭のごとく怒りながら。

放課後の理科室で、夏目は嫉妬心もあらわに主張する。

「——おかしいじゃないか。進藤くんには藤崎さんが居るんだよ？」

それだけでも、もう、なんか、有罪！　って感じなのに、あんな綺麗なお姉さんまで！　うらやましますぎる！　進藤そこ替われ！　って感じだよ！」

本音全開である。

話を聞いているのは、囲碁部の同級生、三谷、金子さん、津田の3人。

進藤ヒカルと藤崎あかりは、日宮ゆかり来襲騒ぎのあと、一足先に帰ってしまっている。正確には、逃げたヒカルの後をあかりが追いかけていった。

「……まあ、夏目のたわ言はともかく、姉ちゃんから聞いた話でもつと、こう、アレなの想像してたけど……あれならなんっーか、問題ねえだろ」

三谷はボカしたが、三谷の姉からの情報はすでに共有されている。

小学生に貢ぐ、筋金入りのシヨタコン女。

それが正しいかどうかはさておき、そこに「美人の」と形容がつくと、問題大アリだ。夏目にとっては看過できない。ただただうらやましい。

「問題あるよ。あかりがかわいそうじゃない。幼なじみですつといつしよだったのに、急に出てきた年上のお姉さんに盗られちゃったなんて」

と三谷に反論したのは、あかりの親友、津田久美子。

一見あかりの肩を持っているようだが、あかりがすでに負けたと決めつけている気もする。

「というかそもそもあのお姉さん、本当に進藤狙ってるの？　そこから疑問なんだけど」

津田の言葉を受けて、金子さんが意外なことを主張する。

「——三谷のお姉さんが聞いたのも、あくまでうわさ話でしょ？　そうだと怪しまれるようなマネをしたのはたしかだと思うけど、どっちかというと、進藤と同じで天然っぽい感じがするのよね」

怪しまれるマネをされた時点で、夏目的にはうらやま死刑なのだが、同意は得られそうにない。

いや、女二人はともかく、三谷は「ちよつとうらやましい」くらいには思っているはずだ。でない「進藤有罪」なんて言葉は出て来ない。

と夏目は勝手に決めつけている。

「ちよつとまとめてみようか。あのお姉さんについてわかってることを」

夏目は当然のように場を仕切りだした。

「名前は日宮ゆかり。三谷のお姉さんと同じ学校で同じ年、クラスは隣。美人で気さくな感じで進藤けしからん。シヨタコンのうわさがあるけど、たぶん原因は進藤と碁を打ってること。ただしお姉さんの真意はわからない。進藤を狙ってるのかもしれないし、そうじゃないかもしれない。どのみちうらやましい」

「夏目くん。私情ノイズが混じっててわかりにくい」

「うらやましい！」

「だれがノイズ100%にしろって言ったの」

情熱のまま語る夏目に、金子さんが冷静にツッコんだ。



「……でもまあやっぱり、鍵は囲碁よね。進藤、小6の終わり頃に急に囲碁興味持ち始めたっていうし」

「そうだね……お姉さんに誘われたのか、進藤くんがお姉さんに頼み込んだのかうらやましい」

金子さんの冷静な分析に、夏目が私情しかない感想を吐く。

「どっちにせよ、進藤がプロ試験受けようってくらいに強くなってんだし、デートにかこつけて、みたいな感じじゃなくて、ちゃんと本腰入れて囲碁やっては居たんだと思うわよ」

それと下心のある無しは別だけど、と金子さんはつけ加えた。

「本当に、進藤のヤツ強くなりやがったな……昔はいい勝負出来てた

のによ」

「え、アンタが進藤と置き石なしに打てた時期あったの？」

三谷の言葉に、金子さんが首を傾げた。

入部が遅かった三谷以外のメンツは、入部当初のヒカルの実力を知らない。

つまりこの場で三谷の言葉が本当だと証言できる人間はいないのだ。だからってみんな疑ってるわけじゃないが、三谷はムキになって反論する。

「あのな！ 言っとくけど入部した時はオレのほうが進藤より強かったんだぞ！」

「で、あつというまに追い抜かれたと」

秒でやりこめられて、三谷はぐぬぬ、とうなった。

抜かされたとはいえ、三谷も海王中のトップクラスと五分に戦えるほど上達している……と、進藤も言っている。

といっても、夏目たちにとって、三谷は最初からはるかに格上で、どれくらい強くなったか、イマイチよくわからない。

「それもお姉さん効果か……」

「んなわけねえだろ。いくら先生がよくても進藤にやる気がなきやあそこまで伸びねえよ」

夏目の私情の挟まった分析に、三谷がツッコむ。

「問題はそのやる気よね。進藤飽きっぽいらしいし」

横から、金子さんが口を挟んだ。

あかり談である。

「生徒のやる気を高いまま居させるのも、いい先生ってのは、あるんじゃない?」

「なるほど、勝ったらデートとかだね許せない」

「夏目、全然違う。あとそろそろブレーキかけないと怒るよ?」

「理不尽じゃない!?!」

理不尽でもなんでもない。

○

「結局、あのお姉さんは、進藤にとっては悪い人じゃないと思う。だから問題は——」

「あかりよね!?!」

金子さんの言葉を、身を乗り出した津田が強引に引き継いだ。

「……まあ、藤崎さんにとってはストレートに悪い人よね。悪い人というか都合の悪い人というか」

「許されない」

今度は夏目が金子さんの言葉を引き継ぐ。

いや引き継いでない。私怨を挟み込んだだけだ。

「かわいそうなあかり……なんであんな美人のお姉さんがライバルなのよ。勝てるわけじゃないじゃない……」

津田が嘆く。

なぜ「なんでこんな強い子が低段に居るのよ」みたいに言ったのか。

「お姉さんが勝った、負けた、みたいな話にはならないと思うけど、藤

崎さんが負けた、ってなる可能性は十分あるわよね」

「あかり、じわじわ距離を詰めようとしてるけど、進藤くんまったく気づいてないし……」

「進藤、見た目通り子供っぽいもんね……」

「つーかさ。もうじき海王中との団体戦だし、それが終わったら進藤のやつプロ試験だろ？ いまつき合うだのなんだのって話されてもウザってえだけなんじゃねえか？」

女子の会話に三谷が口を挟むと、みんなちよつと引いた。

「三谷くん、ひどい……あかりがかわいそう……」

「言ってることは正しくても泣いている藤崎さんも居るんだよ！ いや別に泣いてないしここにはいないけど！」

「あんたそれ藤崎さんには絶対言っちゃだめよ。ただでさえ気持ち的に追い詰められてるんだから」

さすがに三谷もあかりがいる場で言うつもりはなかったが、総ツツコミに気圧された。

「わーってるよ。さすがに本人には言わねえっての……で、結局お前らこの件どうなったら満足なんだよ？」

「進藤くんには両方から手ひどくつられてほしいね！」

「夏目、おまえ爽やかな笑顔でなに言ってるやがる」

「進藤くんには、あかりがなるべく傷つかないフリ方をして欲しいの」
「津田、おまえ藤崎がえられるのはいいのかよ」

夏目と津田にツツコむ三谷。

その様子を泰然とながめながら、金子さんは口を開いた。

「とりあえず、現状を維持するためにも、進藤にはこのまま小学生の心を持って生きていってほしいわね」

たしかに。

ヒカルが一般的な思春期男子だったら……とつくの昔に、日宮ゆかりに惚れるか、藤崎あかりとくつつくかしていただろう。

現状ヒカルの無関心によって絶妙な均衡が保たれていることも、プロ試験を控えたヒカルにとって、それが最適解だと金子さんが分析していることも、なんとなくわかる。

だが、それでも、三谷はツツコまざるを得なかった。

「オマエはマジでなに言ってるんだ」

夕暮れの放課後。

葉瀬中囲碁部は今日も平常運転です。

検討03 進藤ヒカルの場合

「しっかしわかんねえなあ」

プロ試験が終了した数日後。和谷の部屋。

ワールド囲碁ネットでの、日宮ゆかりとの対局を控えたヒカルに、和谷がベッドの上から声をかける。

「——進藤、日宮さんとはずっと打ってるんだろ？　なんでわざわざネット碁で対局するんだ？　しかも名前を隠して」

「相手がオレだつてわかると、ゆかり姉ちゃん手加減するだろうし……勝負したいんだ。全力で」

パソコンデスクに座るヒカルは、静かに答える。

集中しているため、視線はモニタを見据えつつける。

「オマエも強えけど、相手が段違いだからなあ……なあ、なんであの人プロにならねーんだ？」

「わかんねえ。姉ちゃん自身は、ずっとオレと打ってたいからって言ってたけど」

「なんだソレ。塔矢といい日宮さんといい、オマエどうなってんだ？」

「……オレのほう聞いてえよ。本気で」

わずかに眉をひそめて、ヒカルは答えるのを避けた。

それを察したのだろう。和谷はため息をついて、それから別の問いを口にする。

「正直どうなんだ。日宮さん相手に、勝ち目あるのか？」

「わかんねえ。実力差は、和谷と森下師匠ほどは開いてないと思うけど」

「そこまで強えのかあの人……キツイな。オレも冴木さんとなら、5回に1回は勝ち負けの碁を狙えるけど、師匠相手だと勝てるイメージがわかねえ」

「オレとゆかり姉ちゃんの差はそこまでじゃない……いまのオレの、最高の碁を打って、その上でやつと10回に1回、勝ち負けの碁になる、くらいだ」

「どのみち絶望的じゃねえか」

「そうだな……でも、打たなきゃ始まらないんだ。オレとゆかり姉ちゃんの関係は」

真つ直ぐ前を見据えながら、ヒカルは語る。

その真意は、和谷には知りようがない。

ただあきれた声で、和谷はヒカルに声をかけた。

「オマエのまわり、人間関係ややこしすぎないか？」

反論のしようがない事実だった。

『ヒカル、いよいよですね』

——ああ、佐為。いよいよだ。

対局の前に。

背後から語りかけてくる佐為に、心の声で返す。

パソコンのモニタを前に、進藤ヒカルは、武者震いを抑えきれない。日宮ゆかりと出会ってから、もう2年近くになる。

最初に出会ったとき、佐為と彼女の対局の美しさに、思わず見入った。

日宮ゆかりの本気の碁を見た時、その迫力に圧されながら……あこがれた。

その強さに。

そして自分よりもはるか高みに在る佐為あいてに、果敢に挑んでいく、その姿に。

すごい。

そう思う反面、悔しかった。

「ヒカルくんのこの手、すごいよね。一見手控えたように見えながら、四方をニラんでこちらに良い変化を許さない」

「この打ち込みはすごかった。力づくで形にされたって感じで」

日宮ゆかりはヒカルを見ていない。

笑顔も、称賛も、すべては佐為に向けられていて、でも言葉だけは、ヒカルに向いている。

横で話を聞いていた佐為は、無邪気に喜んでいたが、佐為の代理で返事なくちやいけないうヒカルは複雑だ。

だから。

——オレを見てほしい。佐為なんかじゃなく。

そんな思いが、湧き出てくるのも仕方ない。

——だって、ずっと見てきたんだ。

ゆかりと佐為の対局を。

楽しげに打つふたりの姿を。

うらやましかった。

自分も加わりたかった。でも出来なかった。

ゆかりが佐為に向ける情熱に、侵し難いなかを感じて。考えて、ヒカルは身を震わせる。

武者震いか、それとも悔しさからか。

『落ち着いて、ヒカル。ヒカルはずっと見てきたでしょう。私とあの娘の対局を』

気を案じた佐為が、静かに声をかけてくる。

佐為の励ましに、ヒカルは心の声にも出さず、ひそかに思う。

——そうだ。オレは見てきた。それしか出来なかったから。

対局できないかわりに、ヒカルは見てきた。

ふたりの対局を。そして、考えてきた。自分なら次にどう打つかを。

ずっと考えてきて。追いかけてきて。

日宮ゆかりの碁が、藤原佐為の碁が、おぼろげながら見えてきた。

対局を重ねてきたからだろうか。二人の碁は似ている。

まるで日宮ゆかりの延長線上に、藤原佐為が居るかのようで……だから、佐為の本当の凄さもわかってきた。

——佐為はスゲエ。ゆかり姉ちゃんが必死になるのもわかる。

初めて対局したその日から。

日宮ゆかりは、佐為との対局のことしか頭になかった。

いや、ヒカルのことは気にかけてくれたが、興味の中心はいつだって囲碁。佐為だった。

——でも、オレだって捨てたもんじゃねえ。

ヒカルは口の中でつぶやく。

佐為に対するゆかりの応手も、だいぶ見えるようになってきた。

ゆかりが佐為と打った100回近い棋譜も全部並べて、佐為と検討

してきた。

そうするうち、いつのまにか。周りにいた強敵が、強敵ではなくなっていた。

それは、ある意味当然。

日宮ゆかりは進藤ヒカルだ。

実力差、経験の差はあれど、思考の進め方はヒカルに極めて近い。

そして、そんな日宮ゆかりが目指す碁の到達点——藤原佐為が、ヒカルを指導しているのだ。

自分を通るべき筋道（ゆかり）と到達点（佐為）を示されて、進藤ヒカルは恐ろしい速度で強くなっていった。

『あの娘は、出会った頃よりはるかに強くなっています。いまのヒカルでも、勝機は万にひとつ。ですが——』

佐為が語る。

その判断は、ヒカル自身の分析と変わらない。

そして、佐為が言葉を区切った、そこから続く言葉も、ヒカルにはわかる。

ヒカルはマウスを握る手に力を込めて、強くうなずいた。

——ああ。たとえ万が一の勝機でも、絶対に手放さない……こつちを振り向かせて見せる！

この日のために、できる準備は全てしてきた。

あとは……打つだけだ。

——ゆかり姉ちゃん、見てくれ。オレはここに居る！

そう、心のなかで叫んで。

“h i k a r u”は、“y u k a r i”に挑戦を叩きつけた。

○

ヒカルとゆかりの対局は、後半に入った。

形勢は、はつきりとヒカルが悪い。

じわじわと離されながら、序盤中盤となんとか食らいついてきたが、読んでいない手を打たれて、一気に劣勢に立たされた。

——考えろ。このままじゃ中押し負けだ。

ヒカルは顔を歪めながら、思考を巡らせる。

対局自体は、ヒカルにとって会心に近い出来だ。

ゆかりの狙いをよく見極めながら、戦える形を作れていた。

しかし、それでも日宮ゆかりの心に、ヒカルの存在を刻みつけられる碁ではない。

——もう大寄せだ。ここだ。ここで挽回の手を見つけないと終わっちゃう！

モニタの中の碁盤を見つめながら、考える。

この盤面でゆかりなら、どう打つか。そして、佐為なら、どう返すか。

ずっと見てきたゆかりの碁を、自分の中で描く。

ずっと見てきた佐為の碁を、自分の中から引き出してくる。

脳内の碁盤に、石が並べられていく。

その変化は10を数え、20を超え、30に達し、まだ増えていき……あまりの負荷に、脳が悲鳴を上げる。

だが、ヒカルは止まらない。思考を緩めない。

無限に枝分かれする筋道を追って、追って……ついに、勝利に達する唯一の可能性を見出した。

ヒカルは画面の端の表示を確認する。

——残り時間は……まだまだある。勝ち切れる！

喜び勇んでマウスを動かして、石を置く、寸前。

ヒカルはとっさに動きを止めた。

——違う！

直感が全力で悲鳴を上げている。

迷うな、という自分が居る。立ち止まれ、と叫ぶ自分が居る。

葛藤しながらも、かろうじて思いとどまって。ヒカルは思い切り深呼吸して、脳に酸素を取り入れる。

そうすると、頭が再び先程の勝ち筋の変化を考え出す。

先ほどとは別の、ゆかりが打つであろう本当の応手を。

——そうか。ここのヨミ抜けだ。ヨセでこつちから応じられたら、さらに手が要る。この手筋じゃ半目負ける。

どうする。と迷う。

半目勝負に持ち込めたら、"h i k a r u"の、進藤ヒカルの存在は、ゆかりの心に刻みつけることができるだろう。

だが、それで良いはずがない。

勝利をあきらめた碁など、藤原佐為の、日宮ゆかりの、そして進藤ヒカルの碁じゃない。

だが、いまから新たに勝利の手筋を読むにしても、時間がない。

いや。そもそも、この状況から勝利に持っていける筋道など、あるのか。

——あると思って読むしかねえ。どんな馬鹿らしいと思える手筋だって捨てずに追って、探し出してやるんだ……最高の一手を！

高く。高くまで意識を昇らせて、盤面を俯瞰する。
無数に変化する石の筋道を。意識の中の無数の碁盤に並べていく。
空気が薄い。酸素が足りない。進藤ヒカルには過ぎた領域なのだ
と、理解しながら……ヒカルは意識をつなぎとめ続ける。

——まだだ。まだ探せる！

知らず拳を握りしめながら、ヒカルは心のなかで叫ぶ。

たしかにここは、ヒカルだけでは過ぎた領域だ。

だけど、ヒカルの中にはゆかりの碁がある。佐為の碁がある。

二人の碁を翼として、ヒカルはその領域で思考を広げつつける。

永遠にも思えた長い思索。

意識を失いかけた、その末に。

ヒカルは、ついに勝利への筋道を見出した。

「——っハア、ハア……」

荒く息をつきながら、急ぎ確認する。

持ち時間は、もうほとんど残っていない。

この一手が、本当に勝利につながるのか。

日宮ゆかりは、さらなる高みの手を持っているのではないか。

よぎる不安をかなぐり捨てて、か細い勝利を掴み取るために、ヒカ

ルはその一手を打った。

その後はヨミ通りの進行。ヨミ通りの応手が続く。

疲労しきったうえに、考える時間も残されていないヒカルは、当初
のヨミに従って打つしかない。

半ば意識を失いながらも、打ち切つて。

進藤ヒカルは半目の勝利をつかみ取った。



その後のことを、ヒカルはよく覚えていない。

『見事です。この対局の最中、ヒカルは大きく成長した』

そんな佐為の称賛を聞いた気がした。

「すげえ……」

そんな和谷の絶句を聞いた気がした。

だが、そんなことよりも。

日宮ゆかりに、自分の存在を刻みつけた。

その確信に、ヒカルはしびれる程の満足感を覚えていた。

—— 実力差は、まだデカイ。出来過ぎの碁だったのは、わかっている。半分勝たせてもらったようなもんだってのも……

ゆかりの碁は、最後までヨミだけで勝とうとする、綺麗な碁だった。持ち時間を失っていたヒカルは、新たに読みが必要な、筋悪の一手を打たれるだけで、時間切れ負けか、応手を間違えて惨敗していただろう。

——でも、ゆかり姉ちゃんは“h i k a r u”を覚えた。だから、オレの勝ちだ。

そう、心のなかでつぶやいて。

ヒカルは、椅子にもたれかかって天を仰いだ。

検討04 塔矢アキラの場合

塔矢アキラは悩んでいた。

14歳の多感な年頃。

そしてプロ棋士2年目、真価を問われる時。

一般的な少年としても、棋士としても、悩みの種は多い時期だ。だが。

いまアキラの頭を悩ませているのは、思春期特有の懊悩でも、自身の棋士としてのあり方に関してでもない。たったひとりの女性が原因なのだ。

——日宮ゆかり。

彼女とアキラとの関係は、微妙に説明し難い。

端的に語るなら、父が経営する囲碁サロンに勤める少女だ。

3年ほど前、高校生の時に、彼女は突然アルバイトとして入ってきた。

アキラ自身、囲碁サロンに通い詰め、指導碁なども行っているので、顔を合わせることが多い。

気立てがよく、仕事も熱心。

常連の皆にも親しまれており、なにより囲碁を愛しているのがよく分かる。

春からは正規のスタッフとして働いていて、市河さんのように、姉弟のような距離感ではないが、感覚的にはほぼ身内である。

そんな彼女が、なぜアキラの悩みの種になっているのか。

原因ははつきりしている。そして、困ったことに、問題は複数ある。



ひとつ目は、アキラの好敵手、進藤ヒカルについてだ。

彼との因縁は、3年近く前、囲碁サロンでの対局から始まった。石を持つ手もたどたどしい、見るからに初心者の子が、アキラに指導碁を施す。

その強さ、異様さに運命的な何かを感じて、アキラは進藤ヒカルを追いかけた。

対局を拒む彼を、勝負の舞台に引きずり出すために、海王中の囲碁部に入り、そして大会で相まみえた。

荒々しさと神秘的なまでの熟練が入り混じった。

そんな奇妙な対局を終えて、アキラは進藤と、プロの舞台で戦うことを約束した。

その約束は、先日の若獅子戦で果たされた。

プロになった進藤ヒカルの碁は、3年前のものとは違う。

ともすれば以前より弱く感じることもあったが、それでも間違いなくアキラを凌ぐ実力を持っている。

そんな最高の好敵手ライバルと親しいのが、彼女——日宮ゆかりだ。

進藤に聞くと、彼女とは小学生の頃からのつき合いだという。

込み入った関係を聞くのははばかられるが、頻繁に会って対局する仲らしい。

自分とは打ってくれなかったのに、彼女とはなぜ。

そう思うと、非常に複雑な気持ちにはなるが、進藤と対局や研究する仲になった今となっては、まあいいと思える。複雑だが。

○

ふたつ目は、ひとつ目以上に、アキラにとって悩みの種だ。

緒方精次。

父の弟子であり、アキラにとっても頼れる兄弟子である彼と、日宮ゆかりの関係について考えると、正直頭痛しかない。

きっかけは、少し前の、とある休日のこと。

その日は偶然緒方も囲碁サロンに来て、めずらしく長時間腰をおちつけていた。

そんな緒方が、日宮ゆかりが仕事終わりで帰るとなった途端、彼女の後を追うようにしてサロンを出ていった。

緒方の事を信頼しているアキラだが、さすがに動きが不審過ぎる。市河さんに声をかけてから、こっそりと二人を追いかけて——アキラは見てしまった。

日宮ゆかりに情熱的に迫る、兄弟子の姿を。

「オレじゃ不足か」

「頼む、一度だけでいいんだ」

「かならず満足させてやる」

アキラは尊敬する兄弟子のこんな姿見たくなかった。というか彼女居たよね？

あつけにとられていたアキラだが、我に返るとあわてて止めに入っ
た……のだが。

「ゆかり姉ちゃんっ!!」

なぜか最高にややこしいタイミングで進藤が現れて、とんでもない修羅場になった。

怒り心頭の進藤と、必死で弁解する緒方と、あれだけ詰め寄られたというのに、よくわかってなさそうな日宮ゆかりが印象的だった。

アキラは二人を追いかけてきたことを後悔した。

アキラ自身は無関係だというのに、本気で居たたまれない。

「囲碁の話だ」

「あいつは『sai』かもしれないんだ」

「信じてくれ。本気なんだ」

落ち着いてから、あらためて緒方の言い訳を聞いたが、どこまで本当かはわからない。

というか、疑える余地があるとしても、彼女に迫る緒方の絵面がアウトすぎて、どうしても緒方に対する非難がましい気持ち先が立つ。

まあ、それもいい。

ちよつと緒方を見る目が変わってしまったが、まだ理解の範疇だ。だが。

みつつ目の——最後の問題に関しては、アキラの理解の、はるか彼方。



「日宮くんは、パスポートを持っているかね」

普段は対局に使われる、塔矢家の一室部屋。

偶然耳に入った、携帯電話で話す父の言葉に、アキラは思う。いったい日宮さんはどうなっているんだ、と。

「——そう、中国だ。君もいつしよに行ってみないか」

未成年を海外旅行に誘う父が居た。

そして父の会話を盗み聞きする息子が居た。

いや、誤解だと思いたい。

だが、父が彼女を海外旅行に誘う必然的な理由なんてまったく想像がつかない。

あまりにシヨックで、アキラは部屋に戻った後も、しばらく頭を抱えて悶々としていた。

——もし緒方さんの言うように、日宮さんが“s a i”なら……

ヒカルの棋風に“sai”の影響を感じたわけがわかる。

緒方精次が、塔矢行洋が彼女に執着する理由もわかる。

だが、彼女が“sai”だと言われても、いまいち信じられない。彼女が強いのはわかる。

対局を見る彼女の目の配り方を見れば、プロ並みと言われても違和感がない。

だが“sai”とは。

碁界の頂点、塔矢行洋を破る実力者だとは、とても思えない。

むしろ……アキラのひいき目かもしれないが、昔の進藤ヒカル自身のほうが、“sai”のイメージに重なる。

彼女が“sai”だと思えないアキラだが、同時に緒方が“sai”を、彼女を口説く口実に使っているとも思えない。

ましてや塔矢行洋が、囲碁以外の理由で彼女に執着するなんて、ありえない。

だが疑惑を頭から否定もできない。

二人を信用していないわけじゃない。

いや、緒方はともかく父である塔矢行洋を、アキラは尊敬とともに信頼している。

その信頼をもつてしても、完全には否定しきれないのは……日宮ゆかりが美人だからだ。

それこそ緒方精次や塔矢行洋が彼女を狙っていると言われて、笑い飛ばすことができないくらいには。

9割9分の信頼と、1分の疑惑。

それが、塔矢アキラの頭を悩ませる。

たしかめたい、という思いがある。

同時に、知ってしまうのが怖い、とも思う。

もし、緒方や塔矢行洋が恋愛的な意味で彼女に惹かれてしまったのだとしたら……アキラは平静でいられる自信がない。

だから、本人に聞いただすことができないままに。

塔矢アキラは、今日も複雑な視線を日宮ゆかりに送るのだ。

「あの……塔矢くん、わたしになにか御用ですか？」

「お構いなく」

「あんまり見られてると市河さんの目が怖いんですけど……」

「お構いなく」

そんなやり取りは、常連の皆に生暖かい目で見られながら、進藤ヒカルがやってくるまで続くのである。